
地方都市物語・3・夏の夜の幻（再び旭川へ）

asami

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地方都市物語・3・夏の夜の幻（再び旭川へ）

【Nコード】

N2204A

【作者名】

asami

【あらすじ】

アリアと柚子が再び旭川を訪れた先には、双子が張り込んでいた。謎の女子大生^{さち}禎がアリアたちの生活に入り込む。

一方で、ヒロと女怪盗D（デイ・）のもと事件が起こり…。

ヒロがアリアに秘密にしていることは？

アリア、母に会う。

1・奇妙な三角関係

「柚子、少しの間留守番を頼む」

「え」。絶対アリアと一緒に北海道に行く！ 留守番なんてつまらないよ。蒸し暑い東京から脱出したい！」

「そんなこと言っても、学校はどうする」

「学校なんて休む」

「今度休みの時に行こう」

夕方近く、マンションの一室は騒がしかった。アリアは柚子と押し問答になり収拾がつかなくなっていた。

アリアの義兄、ヒロから連絡が入り、いよいよ旭川へ再度行くこととなったが、柚子も一緒に行くといってきかないのだ。

「そんなに休んだら勉強が遅れる」

「どうせすぐに夏休みだもん」

柚子はまったく譲らず、アリアは困り果てた。

「それに、私がいないとアリアなんてまともな食事しないじゃない。アリアって本当に女？ 外見だけでも女らしくしたら？」

常に男の姿でいるアリアに、柚子は大げさなため息をつけて見せた。

「余計なお世話！」

今やすっかり同居人として居座ってしまった柚子は、遠慮することなく以前から居たかのように振る舞っていた。

泥棒アリアと、その弟子志願？ の女子高生、柚子との奇妙な共同生活はなんとなくうまく続いていた。

柚子はアリアの生活に溶け込むどころか不可欠な家族となっていた。

「じゃ、今度のテストで十番以内だったらいいよ」

考え込んでから、アリアは苦し紛れに条件を出したが、柚子の普段の成績を甘く見ていたため、安易な約束をしたと後悔することに

なった。

柚子は苦もなく上位に入ってしまった、すんなりと一緒に行くことになったのだった。

その頃、東十無刑事は自宅アパートで双子の弟、昇に愚痴を漏らしていた。

「北海道まで行かなきゃならない羽目になった」

「応援要請って、そんなに人手がないのか？ それに、Dが現れたと言う情報は確実なものじゃないんだろう？」

「唯一、Dに会ったことがあるから呼ばれただけだ。と言っても、逆光でまともに顔は見えなかったが……今までに誰も人相を確認していないからな。Dが現れなければ、直ぐ帰ってくる」
「ふうん」

通称D。闇で暗躍する女怪盗。被害者は後ろめたい金を盗まれることが多く、皆、被害届けを出さない。十無は以前、Dにアリアがらみで遭遇したのだった。

十無が荷物を詰めていると、昇もいそいそと荷物をまとめ出した。
「で、何故お前も出掛ける用意をしている？」

「いや、俺も応援要請があつて」

「旭川から？ 興信所でもそんなことがあるのか」

昇の勤めている音江探偵事務所は、池袋にある事務所が支社で、旭川に本社がある。小さいながらも、堅実な事務所だった。

「本当だよ！ サボりじゃないって」

昇は、言われる前に慌てて否定したが、かなり怪しかった。Dがいるということは、アリアとその義兄、ヒロも何らかの形で関係していることが多いと、容易に想像できる。どうせ、今回も何かと理由をつけて、昇は無理矢理旭川に行こうという魂胆なのだろう。
昇はアリアが気になっているらしい。

性格は正反対だが、やはり双子。十無は昇の行動パターンをよく承知していた。

十無は昇の言動を疑いながらも、一緒に電車を乗り継いで空港へ向かった。

同じように、ある一台のタクシーも空港へ向かっていた。

飛行機は泥棒たちと刑事を乗せて離陸したのだった。

飛行機の小さな窓から地上を見下ろすと、そこにはなだらかな丘が、幾重にも広がっていた。そして青々とした畑。それはよく写真で見かける丘の風景そのものだった。

「ほんと、いつ来ても小さい空港よね。滑走路もちよつとしかないし」

柚子はきよろきよろと落ち着きがない。

「もう行くよ」

若干ウエーヴのかかった肩までの髪に、白い大きめのワイシャツをはおり、パンツスタイルで一見女性が男性か分らないような出で立ちをしたアリアは、さっさとタクシー乗り場に行こうと柚子を促した。

「あつ、待ってアリア。ちょっとあそこ、あの刑事さんたちじゃない？」

柚子が指をさしたほうに、見慣れた二人がいた。どうやら荷物を待っているようだ。

「双子って目立つね、わかりやすくてありがたい。私達を追ってきたのではないようだけれど、気づかれないうちにさっさと行こう」

「え、あの刑事さん達といたら楽しいのに。ねっ、二人のところへ行こうよ」

「無茶を言わない、さあ行くよ」

「わかったわよ。待って、アリア！」

空港を出てタクシー乗り場に行くアリアの後を追いかけてながら、

柚子はわざとらしく大きな声で、アリアの名を呼んだ。

アリアがまずいと思ったときには、昇と十無は、その声に気付いてこちらを向き、柚子がタクシーに乗りうつしているところを見ら

れたようだった。

「警察だ！ そのタクシー、とまれ！」

二人が大声で叫びながら、こちらへ走って来た。

「ヒロ、早く車を出して！」

ぱたんとドアが閉まり、ぎりぎりのところで黒いタクシーは走り出し、アリアは胸をなでおろした。

「柚子、わざと大声出したな」

「えへへ、わかった？」

アリアが睨んでも、反省する様子もなく、柚子は舌を出して肩をすくめた。

今楽しいのが一番という考えの柚子は、時折、ゲーム感覚で突飛な行動をとる。柚子には些細なことなのかもしれないが、アリアはその度にかなり冷や冷やさせられていた。

今回も柚子から眼を話さないようにしていないと、何をやらすかわかったものじゃない。

アリアは苦笑交じりに小さくため息をついた。

東昇は重い荷物を持って走ったため、息を切らし、タクシー乗り場から走り去ったばかりの黒塗りの車を、悔しそうに目で追って舌打ちした。

「畜生！ タクシーもいない。車さえあれば！」

「十無、今のアリアか」

「多分そうだ」

十無は冷静にそう答えたが、悔しそうに顔をしかめた。

「十無、昇！ こっち！」

二人でタクシーが来ないかと、きよろきよろしているところにエンジ色のサーフに乗った若い女性が二人に手を振った。

二人の幼馴染で昇とは同僚の、音江槇おとえまきだった。

「迎えに来てくれたのか！」

「丁度いい、さっきの黒いタクシーを追ってくれ」

二人は慌ただしく車に乗り込みながら、これ幸いとアリアを追いかける気になっていた。

「待って、あなた達ぎゃあぎゃあ騒いでぶち壊しにしないでね。居所は分かっているの」

ニツと笑いながら、音江槿はさらさらストレートのロングヘアをかき上げた。パツチリとした瞳が印象的だ。

「何がぶち壊しになるんだ」

何か知っているような口振りに、昇はきよんとした。

「嫌ねー、昇は調査書読まずに来たの？ 調査対象が誰なのかくらいしっかり確認してきてね」

槿はため息をつきながら、ぎゅんとアクセルを踏み込んだので、空港は瞬く間に視界から消えた。

「あれ？ アリアが調査対象なのか。でも、いったい誰の依頼だ？」

「昇、仕事に来たんだろ？」

「はは、急だったから資料見る暇なかった」

笑ってごまかす昇を、音江と十無はじろりと睨んだ。

昇は旭川に行けると言う口実ができただけで舞い上がり、仕事の目的は後回しにしてしまったことを悔いた。

「あの少年を警察も追っているの？」

音江槿はそう訊きながら、少しでも情報がないかともいうように、横目で十無の顔を盗み見ている。

「いや、今回は違う件で来ている」

言葉少なく、十無が答えた。

「どんな事件？」

「それは……」

「教えてくれないのね。いいじゃない、どこかにリークする訳じゃないんだから」

十無が言葉を濁したので、音江槿はむうつとふくれた。

「アリアの調査依頼は誰から？」

十無はそんな槿にはお構いなしに、質問する。

「そつちの情報は教えないで、訊き出そうっていつの？　十無には言えないわ、守秘義務ね」

「槇、俺には後で教えてくれ」

「昇、呼び捨てにしないでくれる？　私はあなたの上司なのよ。音江副所長でしょ？」

「槇が副所長なんてできるのか？　親父さんはもうそろそろ引退するのか？」

十無が心配そうに言った。

「そういう言い方しないで、私も言いたくなるから。泥棒に甘い十無刑事。あ、昇も首突っ込んでいるわね、よくサボって」

音江槇は昇をじろりと睨みながら、そう付け加えた。昇は何も言いません、愛想笑いをしたが、十無は「どどういう意味だ」と、口を尖らせた。

「さあどういうことでしょう。あなたの最近の行動はすべて知っているわ、偶然なんだけれど」

「つけていたのか」

十無が動揺した。現役刑事が、槇の気配に気付かなかったのだから、なかなかの尾行技術だ。十無の面目丸潰れ状態だ。

「ターゲットをつけていたら二人がいたんだもの。ずいぶんあの泥棒と仲がいいじゃないの」

「別に仲がいいわけじゃ……」

十無がしどろもどろに答える。

普段同様などしない十無が、慌てている。昇は高みの見物でニヤニヤしながら見守っていた。

「一緒に食事したり部屋に上がり込んだり。幼馴染として忠告するけれど、刑事がそれじゃ、やばいんじゃないの？」

「それはたまたまそうだっただけで……」

畳み掛けるような槇の話し振りに、十無は返答につまり、とうとう窓の外に視線をそらしてしまった。可哀想に思ったのか、その後、音江槇はそれ以上十無を追い込む様な話題にはふれなかった。

槇は昔から洞察力が鋭く、思ったことは直ぐ確かめて何でもはっきりさせないと気が済まず、おまけに曲がったことが嫌いな性格だった。今も変わらない。でも相手の気持ちや少しは考えるようになったようだ。

小学生の頃、槇は掃除当番をサボった男子の家まで押しかけて、その子の母親の前で、あなたは掃除当番を守らない常習犯だと、攻め立てたことがあった。

その子は、追い詰められて開き直り、他の奴だってサボっている、自分だけ悪者呼ばわりは変だと反論した。すると、槇はクラスの人一人からサボったことのある奴を聞きだすと、サボったことのある子の家を回り、同じことをした。

容赦ないやり方に、クラスメイトからは、影で、チェック魔とあだ名され、陰口を叩かれていたものだ。少しは大人になったのだろう。

昇が昔のことを思い出していると、いつの間にか、畑の中を真っ直ぐにのびる一本道が終わり、住宅街を抜け、中心街に近くなっていた。といっても都会のごみごみした感じはなく、道路は碁盤の目で道幅もありゆったりしている。

気温は盆地の為三十度近くあるようだが、全開にしている窓からの風は、心地よい爽やかな感じがした。晴天で雲がないまぶしい青空、空が広く感じられた。

前に来た時、真冬の厳しい寒さを体験した昇には、この暑さが意外に感じた。

「やっぱり、北海道の夏はいいな」

のんきにそんなことを呟いている昇の横で、十無は「気楽でいいな」と、ぼやいていた。

アリア達も車の窓を開け、同じ風に当たっていた。

「ヒ口、おかげで助かった」

助手席に座っているアリアは、久しぶりの眩しい空に目を細めた。

「旭川でもタクシー運転手なの？」

「どこでも比較的働きやすいからね。しかしかなり稼ぎの悪いタクシーだな、回送の時間が多い」

笑いながら煙草を燻らせたヒロは、相変わらず運転帽をかぶっており、長い癖毛の髪は無造作に束ねられ、以前と変わりなかった。

口調も穏やかで、アリアは会うまでの不安だった気持ちが払拭された。

柚子は後部座席に座り、暫く二人の会話をじっと聞いていたが、不満そうに「ヒロもずっと一緒なの？」と、アリアに訊いてきた。

だが、アリアの代わりにヒロが「勿論」と答え、「やっぱりついて来なかった方が良かったか？」と、嫌味っぽく続けると、いつもならやり返すはずの柚子が、返事もせずに車窓をぼんやり眺めた。

「柚子どうしたの？」

「別に……」

なにやら気まずい雰囲気だとアリアが思っているうちに、マンションについた。

建物は街なかの広々とした公園に面した静かな環境にあった。見覚えのある十階建のマンションは、アリアが冬に滞在したところだった。

車から降り、エントランスを抜けて無駄に広いホールを通り、エレベーターで七階へつくと、ヒロは長い廊下を、先に立って歩いた。「はい、どうぞ」

ヒロは重そうな玄関ドアを開けて二人を招き入れた。

「冬より眺めがいいね」

アリアが居間にあるバルコニーから外を眺めると、公園の青々とした木々が見えた。冬場はただ、雪が積もって何も見えず、降ってくる雪を眺めるだけだったのを思い出した。

「ねえ、アリアひょっとしてヒロと一緒に住むの？」

柚子はヒロがキッチンへ行くのを確認した後、アリアの側へ寄っ

てきて、そつと小声で不満を漏らした。

「そつだよ」

「ここつてヒロのマンション？　だったらホテルに泊まりたい。男の人が一緒なのは嫌」

「ホテルに長々と泊まるわけにも行かない。部屋数はあるからそんなに気にならないよ。それに今さら、私のところには押しかけてきたくせに」

「アリアは別だもん、それに女だもん」

「じゃ、柚子だけホテルに行きなさい」
「嫌」

「じゃ決まりね、贅沢言わないこと」

「せつかくアリアとの旅行なのに」

半ば強引にアリアは押し切ったが、納得できないまま話を中断されて面白くない柚子は、行き所のなくなった不満を、これ見よがしに声に表して抗議した。

「疲れただろう、紅茶をどうぞ」

ヒロが大きなマグカップに、並々と濃い紅茶を淹れて、居間の中ほどにある応接テーブルに置いた。

「私是要らない。疲れたから少し横になる」

「じゃ、奥の部屋を自由に使うといい」

ヒロが廊下に面したつきあたりの部屋を指し示すと、柚子はボストンバックを持って行き、無言でパターンとドアを閉めた。

「俺もあいつが苦手だ」

ヒロはアリアの横にどさりと座り、紅茶を飲むとため息をついた。
「俺も、つて……」

「柚子もそう思っているだろう、お互い様だ」

「いつもはあんな感じではないんだけど」
「どうしてこんなに仲が悪いんだろう。アリアには理解できなかった。」

「柚子は俺のことを敵視している、いやライバル視している」

ヒロは楽しげにニヤニヤした。

「ライバルって何の？ 何を面白がっているの」

「恋のライバル」

「からかわないでよ、そんなことはないよ」

「ふうんそうかな、だってお前柚子に言っただろ？」

ヒロは男装しているアリアのことを柚子が好意を持っているのではないかと疑っているようだった。

ベランダの窓が開いていて、そこからひんやりとした風が入ってくる。両手で包み込んでいたマグカップの温もりが、心地よかったが、じっとヒロに顔を覗き込まれると、アリアは何故だか顔までも熱くなってきた。

「柚子にペンダントの中を見られて、もう知っているよ」

誤解を解くためにアリアは事情を話したが、ヒロは納得していないようだった。

「そうか……じゃあ試してみるか」

ヒロは廊下に柚子の気配を感じ、アリアの耳元で囁いた。

「試すって？」

「こういうこと」

アリアは一瞬のうちに抱きすくめられ、持っていたマグカップの紅茶がこぼれそうで気を取られていると、次の瞬間にはヒロの顔が目の前に迫ってキスをされていた。

「アリアの馬鹿」

タイミングよく柚子がその場面に遭遇し、柚子は顔を真っ赤にして外へ飛び出していった。

「何するんだよ、変な誤解されちゃっただろう」

何とか腕の中から抜け出したアリアは、柚子を追いかけようとしたが、再び腕を捕まえられた。

「離せ！」

「待て、冗談はこれくらいにして、実はまずいことが起きている。あまりちよろちよろするな」

「でも柚子が」

「大丈夫だ、帰ってくるさ」

「そんな無責任な」

「それよりこの隣に、音江という女探偵がいて、ここのことろず
つとつけられている」

「ひょっとして、刑事さんの幼馴染とかいう音江槇のこと？ 空港
に東刑事達がいたし、ここへ来ているのかも」

探偵がいったい何のために？ 誰に依頼を受けたのか。まさか、
昇が職場の同僚を巻き込んで、つけまわしているわけではあるまい。
アリアは色々考えてみたが、見当がつかなかった。

「多少邪魔になるが、そんなに面倒なことにはならないだろう。だ
が用心しろ」

ヒロはそう言いながら、アリアの髪をなぜている。多分、ヒロに
はそんなことはたいした問題ではないのだろう。ただ引き止めるた
めの口実だったのではと、アリアは思えてならなかった。

2・柚子の気持ち

「おい、本当か？ 隣にあいつらがいるというのは」

昇は興奮してつい声が大きくなった。

自分の働いている探偵事務所でここまで情報を掴んでいたとは、昇は思いもよらなかった。もっと真面目に事務所へ顔を出していればと、今更ながら昇は後悔したのだった。

「大声出さないで。そうよ、十無がいつも追っているアリアという泥棒がいるのよ」

壁を一枚隔てた部屋では、十無と昇、音江槇がテーブルを囲んで座り、密談？ していたのだ。

「もう一人は柚子で、あとは誰だ？」

心持ち小さな声で十無が言った。

「自称ヒロという人物で、確か窃盗の容疑者じゃなかったかしら」

「またヒロか、暫くアリアの前に姿を現さないと思ったら」

昇は煙草に火をつけながら、面白くなさそうにため息をついた。

「何の目的でやつらが動いているのかも突き止めたのか？」

悔しそうに訊いた十無に、槇は得意げな様子で、「なんとなくね」と答えた後、急に真剣な顔つきになった。

「で、交換条件。あのアリアという泥棒の素性知りたい？ 協力しにくれたら情報流してもいいけれど」

「どういうことだ？」

「実は、警察沙汰に絶対しないでほしいというのが依頼人からの条件なの」

「何だつて？ それはできない、じゃあ別行動だ。それに、そんなことは自分で調べる」

真面目で融通の聞かない十無は、昇の予想通りのことを言った。そして、立ち上がって部屋を出ようとした。

不正を許せない正確だった槇が、そんなことを言ったのも、昇に

は驚きだった。

音江榎も世間の荒波にもまれて苦労したのかなどと、昇は二人のやり取りを口出しせずじっと見物していた。

「待って、今までたいしたことはわからなかったじゃない。それに私の調査報告が終われば逮捕してもいいの。少しの間だけじっとしてくれたらいいのよ」

「無理だ。音江、お前今回だいぶ前金もらっているだろ」

十無は懇願する榎をじっと見据えて冷ややかに言った。

「そんなことないわよー」

そう言いながら、音江は無意識に目をそらしている。

「嘘をつけないやつだな、昔から。気をつける。ちよつと間違えると共犯になるぞ」

「わかつているわよ、そんなこと」

「心配だな、いったい依頼者はどういう奴だ」

「それはいえないの。というか会っていないのよ。メールでのやり取りと、後は口座に振込みがあっただけ。このマンションの部屋も用意してくれたのよね」

「いったいどこの金持ちだよ」

「そんなことより協力してくれるわよね？　じゃないと、いかにあの泥棒と仲がいいか上司に……」

「脅しじゃないか……分かった」

十無は渋々協力を承諾した。

「オーケー、そうじゃなきゃ。で、どうやらヒロはDと何か企んでいるようなの」

旭川駅前を中心街、デパートが建ち並ぶ歩行者天国を、柚子はあてもなくぶらぶらしていた。

よく知らない土地で一人歩いていると、なおのこと孤独感が強くなってしまった。

もう日も暮れかけてきたが、柚子はマンションに帰る気になれな

かった。

「わかっていたことじゃない、ああいう関係なのは。別にいいけれどさ」

すっとベンチに座り、行きかう人の流れをぼうつと眺めているが、その目はどこも見ていなかった。

今まで何もかも一人でやってきた。誰にも頼れず、頼らずに。アリアと生活し始めてから、それがどんどん変わってきていた。傍にいつもいてくれる安堵感、それは居心地がよかった。自分を見てくれている安心感は、今までに無いものだった。

結局は、アリアを支えているフリをして、自分が必要とされているって思っていたのだ。でも、アリアにはヒロがいる。きっとこれからだってそれは変わらない。

柚子は自分の感情を冷静に分析してそう結論付けた。

アリアに自分だけを見ていてほしいと強く思っているのだと、柚子は改めて自覚したのだった。

「ふん、馬鹿みたい。前の状態に戻っただけじゃない。さてと、久しぶりに指の運動でもしようかな」

自分に言い聞かせるようにそう呟くと、歩行者を今までとは違う鋭い目つきで物色し始めた。

そのとき、視界の隅にタクシーから降りるアリアを見つけたのだった。直ぐ側に停車している車内には、十無と昇らしき人影も確認できた。

「柚子！」

同時にアリアも柚子を見とめ、こちらへ走ってきた。

今は会いたくない！

慌ててベンチから立ち上がった柚子は、逃げるように行きかう人の中に紛れ、そのままずりりと近くのデパートに姿を消した。

アリアが続いて追いかけてきたが、柚子の姿は見つけられず、諦めて引き返したようだった。

「あー驚いた、人が少ないから逃げるのも一苦労だわ」

アリアは尾行を承知で、心配して探しに来てくれたのだ。そう思うと、柚子は少し胸の奥が温かくなった。

女子トイレへ入った柚子の手には、既に男物の黒い財布があつた。アリアから逃れた後、もやもやした霧がかかったような嫌な気分を吹き飛ばしたくて、柚子は『仕事』をしたのだった。

「あなた、それ盗んだのね？」

突然背後から女性の声がした。いつもなら用心深く、あらゆることに注意を払っているはずの柚子だが、今日に限ってはどうも調子が狂っていた。

「それ、男物の財布でしょう？」

狼狽してその場に立ち尽くしている柚子に向かって、ショートヘアで茶髪の若い女性は、咎めるでもなくしげしげとこちらを見ていた。

「ねえ、楽しい？　そういうこといつもやっているの？」

笑みを浮かべ、楽しくて仕様がないう感じで柚子の方へ近づいてきた。

「お姉さん、何か勘違いしているわ」

後ずさりしながら、しかし従来の落ち着きを取り戻した柚子は、その娘を観察した。赤いタイトスカートに白いノースリーブを着て、小さなリュックを肩にかけている。バランスのとれたスタイルで柚子より幾分背が高かった。警備員や補導員ではなさそうだ。

「なんだかわくわくするわ。そんなに警戒しなくてもいいわよ、警察に突き出したりしないから。ただ、興味があるの」

彼女は興奮し、早口にまくし立てた。

「興味がある？」

柚子はわけが分からず確認するように聞き返した。

「実はねえ、ある程度知っているの。あなた達のこと」

「私達のこと？」

柚子は警戒した。危険な人物なのか？　アリアのそれともヒロの

知り合い？　このまま逃げ出したほうがいいのか？

「そんなに困った顔しないで。わたしは味方よ。刑事達の尾行が離れる機会を待っていたの。そうそう私は禎さちって言うの、宜しく」

「……あなた何者なの」

禎と名乗るその娘の眼をじっと見据えて、柚子は探るように尋ねた。

「ねえ信用してよ、もちろん今のことは誰にも言わないわ。ね、それでいいでしょ」

柚子の質問には答えずに早口でそう言うと、あなたのマンションへ行きましようと、柚子の腕を引っ張った。

「今すぐは帰りたくないの」

柚子は弱みを握られてしまい、言うとおりにするしかない諦めながらも、一方では一人で帰らずに済んだことにほっとしていた。

3・柚子が二人

「柚子、こんなに遅い時間までいつたいどこへ行っていたの。それに、どうして逃げたりしたの？ あんなのヒロの悪ふざけなんだから、いちいち取り合わなくていい」

柚子がどんな顔をして帰ったらいいのかと、ためらいながらドアを開けると、玄関先で待ち構えていたアリアが、心配の入り混じった苛々した口調で静かに怒った。

柚子と禎はあれから、ゲームセンターやカラオケに行って時間をつぶし、帰宅したときには二十三時を過ぎていた。

柚子はばつが悪そうに、「ごめんなさい」と、小声で力なく謝った。

「もういいだろアリア。そんなに子供じゃないし、帰ってきたんだから中へ入れてやれ。夏といっても夜風は寒い」

居間にいたヒロが、水割りの入ったグラスを持ったまま出てきた。両親に反発する娘が夜遅く帰って恥ずかしそうに謝るというような、三流ホームドラマでよくあるシチュエーションを、柚子は思い起こし、おかしくてつい一人でにやけそうになった。

でも、ヒロみたいなお父さんはこちらから願い下げだ。内心、柚子はヒロに舌を出しながら、肩を落として反省している娘を演じていた。

「あのお、お取り込み中みたいですけど。初めまして、今晚は。柚子ちゃんと友達の禎です。アリアさん、ヒロさんお世話になります、宜しく」

柚子は禎のことをすっかり忘れていたが、ドアの陰に隠れていた禎は、ちょこんと顔をだし、早口で自己紹介をした。

「あのね、ちょっとへましちゃった」

ヒロとアリアがどういう反応をするのかドキドキしながら、柚子は苦笑いした。

「ちょっとだけ居候させてほしいんだって」

ぽかんとしている二人の顔色を見ながら、柚子は急いで付け加えた。返事を待たずに柚子は禎を奥の自分の部屋に引っ張った。

どうやら二人とも禎とは面識がないようだ。だったらなぜ禎さんは名前など私達のことを知っているのか。柚子は少し考えようとしたが、すぐに悪い人ではなさそうだからと、考えるのをやめてしまった。

いったい、どうなっているのか。あの娘は誰なのか。ヒロとアリアは困惑した表情で、顔を見合わせた。

「柚子が一人増えたな。でも、柚子の機嫌が直ったようだし、良かったか」

まあいいか、たいした問題ではないと、ヒロはすぐに結論を出した。さほど困った風でもない。ヒロはグラスを飲み干してから居間に戻り、空になったグラスに何杯目かのウイスキーを注いだ。

「もう止めなよ、酔っているでしょ」

アリアは眉根を寄せた。

アルコールを多量に摂取しても、ヒロの態度はさほど変わらないが、いくらか気が大きくなるようだった。そうだった時には決まって絡んでくるのだ。アリアはそれが嫌だった。

「飲むからには酔わないと」

ヒロは口の端で笑い、立ったままグラスをあおった。

「何を言っているんだか。あのさ、禎さちってどこかで聞いた名前のようないきが……」

「お前、女の知り合いが多いな、今度紹介してくれ」

「酔っていて話にならない、もう寝る、おやすみ！」

アリアはむっとして、ヒロに背を向けた。

「そんなこと言うなよ」

部屋に行こうとしたアリアは、不意に背後から抱きしめられた。

「よしてよ、また柚子に変な誤解をされる」

「誤解結構、俺は一向に構わない」

「私は困るの！」

アリアはヒロの腕力には全く齒が立たず、なかなか腕の中から抜け出せない。

「そんなに嫌がるな、悲しくなる」

「泣き落としは聞きません、離してよ」

「つれないな。俺、そんなに嫌われているのか」

ヒロはふっとため息をつく、腕をはずした。

「そういう問題じゃないでしょう？ 義兄さん」

アリアは兄らしくしてほしくて、わざと義兄と呼んだ。

「血のつながりはないから、その呼び方はやめろ」

「でも義兄さんは義兄さんだよ」

アリアはヒロのほうへ向き直って繰り返した。

「やめると言っているだろう」

「わかった……」

ヒロのきつい表情を見て、アリアは機嫌を損ねてしまったと、後悔した。

Dと過ごしていた間、ヒロは何を考えていたのか。気持ちの整理とは、どういう意味だったのかと、アリアは喉元まで出かかっていたが、またヒロがいなくなってしまういそいで、問いただす勇氣はなかった。

「……ヒロはまた何処かへ行くの？」

「どうして」

「なんとなく。ヒロは前と変わらないけれど、無理にそう振舞っているように見える」

「馬鹿だな、何処にも行かない」

「本当に？」

「ああ、そう決めた」

ヒロは微笑んでいたが、アリアにはその表情が何故か悲しそうに見えた。

朝から天気がよく、日差しがまぶしい。テレビの天気予報では、今日も日中三十度を超す真夏日になると伝えていたが、まだ朝も早いせいか窓を開けると涼しい風が入り込んできて心地よかった。

二人の女の子がキッチンで朝食の支度をしながら、賑やかにおしゃべりをしている。昨夜は遅くまで起きてずっと話し込み、二人とももうすっかり打ち解けていた。

「柚子ちゃん、あの二人いつ起きてくるの？」

「多分、午前中には起きてくると思う」

柚子は上機嫌で、鼻歌交じりに味噌汁の味をみている。

「不規則な生活はいけないのよ、私も人のことは言えないけれど。さてと、起こしてこようかな」

禎はまずヒロの部屋のドアをノックしてそつと開けた。

「ヒロさん、朝ですよーっと。あれ、もう起きていたんですか」

「おはよう、アリアはもう起きたかな」

ベッド横にある、椅子に座って小説を読んでいたヒロが、顔を上げた。

「いいえ、まだ。これから起こしに行こうかと」

そう言いながら部屋を出ようとした禎を、ヒロが呼び止めた。

「君は行かなくていい。俺が行くから」

「いいですよ、私が起こします」

「だめだ。これからアリアの寝ている部屋には絶対入らないこと。いいね」

ヒロの口調は威圧的だった。昨日とはまったく違う、ヒロの人を寄せ付けない態度。禎はアリアの寝室へ行くヒロを見ながら、少し戸惑っていた。

「なんだか、秘密主義なのね」

もうそこにはいないヒロに文句をぶつけると、禎はキッチンへ戻ろうとしたが、ベッドサイドテーブルにある小さな紙切れが目にとまり立ち止まった。

禎はヒロが戻ってこないことを素早く確認してから、走り書きしてある内容を覗き見た。

「グランドホテル二〇時・D 何のことかしら」

禎はその場で、ポケットから携帯電話を取り出して素早くメールを送り、そつと部屋を出た。

普段であれば部屋に人の気配がした時点で、アリアは飛び起きるのだが、ヒロがいることで安心していただけのため、熟睡していた。ヒロに何度か「起きろ」と、揺さぶられたが、まだ眠くて布団に潜り込んだ。

「もう少し寝かせて。どうせ急ぎの用事はないんだから」

アリアは眠そうな声で、布団の中から返事をした。

「それがあるんだ、急用が」

ヒロがカーテンを開け、眩しい日の光が窓から差し込んだ。

「今日くらいゆっくりできると思ったのに」

「文句を言わずにさっさと起きろ。あの二人を少しは見習え。早くから起きて朝食の支度をしているぞ」

「まだ七時過ぎだよ。昨日なかなか眠れなかったのに」

布団の隙間から、壁掛け時計をのぞき見て、アリアがぼやいた。

「だめだ、起きろ」

ヒロが布団を引っ張って取り上げようとしたので、アリアは慌てた。

「分かった、起きるから部屋を出て」

「その前に顔を見せてくれ。おまえ、俺に素顔を見せなくなったな、顔を忘れてしまいそうだ」

「いいよ、忘れて」

アリアは布団から手だけ出して、ベッドサイドテーブルからサングラスを取った。

「俺に顔を隠す必要はないだろう?」

「ん、そうだけれど、なんとなく習慣で」

「習慣か」

面白くなさそうにそう呟くと、ヒロは部屋を出ていった。

「前は無理矢理でも、自分の思い通りにさせられたのに……」

ヒロに以前のような強引さはなかった。ほっとしてもいいようなものだが、アリアは物足りなく感じたのだった。

アリアはベッドに座ったまま、ヒロが出て行ったドアを見つめたのだった。

「ヒロさん、朝食できましたよ。アリアさんは起きました？」

ご飯をよそいながら、禎がにっこり笑顔で言った。

「いま来ると思う」

食卓テーブルにつきながら、ヒロは笑顔でこたえたが、禎には幾分不機嫌そうに見えた。

柚子もなんとなくそれを察知したようで、ご機嫌を取るように、ヒロの首に手を回して猫なで声を出した。

「ヒロ、今日はどんな予定なの？ 私も何かお手伝いしたいな」

「特に何もない。何か目的があってアリアを旭川に呼んだわけではない」

昨日の今日で、何を言っているんだとも言いうように、ヒロがつっけんどんに応えると、柚子は嘘ばかりと言いたげに「ふうん、そう。つまらないな」と、ヒロの後ろで舌を出し、椅子に座った。

「何がつまらないって？」

アリアが起きてきた。

禎が自分の隣の席をアリアに勧めた。

昨夜からの突然の同居者にアリアは戸惑い、「おはよう」と挨拶をするのが精一杯だった。禎はというと、自宅で過ごしているかのように伸び伸びしていた。

お互いに素性が良く分からないもの同士が一見家族のように同じ食卓を囲み、朝食をとっている。ふとそう考えると柚子はおかしくてニヤニヤしてしまった。

「どうしたの？ 柚子」

「別に、家族みたいに賑やかでいいなと思って」

「家族ねえ」と、ヒロが苦笑した。

「ところで、禎さんは大学生？ 親が心配しないの？」

アリアは何か身元を確認しようとした。

「大学生だけれど、夏休みで友達のところを泊まり歩いていたら親は心配してこないわ。ついでに、どうして一緒に住みたかったかというに興味があったの。柚子ちゃんも気に入ったし、ただそれだけ」

早口に禎が言った。

「理解できない」

ヒロが顔をしかめた。

「理解できなくてもいいの。私も使ってください、柚子ちゃんみたいに。そりゃ最初はスリとか教えてもらわないとならないけれど」

禎が言い終わらないうちにヒロとアリアの箸が止まり、口を揃えていった。

「何を……」

「そんな隠さなくてもいいのよ、もう知っているんだから」

禎はにつこりしながら、平然と話した。

「昨日、へまして言ったでしょ。あの、見られちゃったの。で、知っているの」

おずおずと柚子がすまなさそうにしている。暫しの沈黙の後、ヒロが禎の目をじっと見て言った。

「遊びじゃないんだ、一生日陰の身になってしまふ。何もいいことはない」

真顔でそう言われて、少したじろぐがそれでも禎は納得しない。

「選択の余地はないわ、このまま警察に行ってもいいのよ」

「スリは現行犯じゃないとなかなか捕まえることができない」

「あなた達のことも多少知っているわ、少し調べたの」

ヒロが一瞬動揺した表情を見せたが、すぐにいつものポーカーフ
エイスを取り戻した。しかし、禎はそれを見逃さなかった。

「二人の身元も」

その言葉を聞きヒロとアリアは、お茶を飲む手を止めたのだった。

4・下準備

「君はいつたい何者だ」

ヒロの口調が厳しくなった。

「何者っていうほどの者じゃないわ。その筋の情報を持っている家族がいて、ちよつと反抗期で家族に反発していて、で、正反対の職につきたいってだけよ」

そう言ってから、禎はたいしたことでもないのに、そんなに怖い顔をしなくてもと小さな声で付け加えた。

「サツか！」

ぎよつとしてヒロは声を荒げた。

「違うわ。そんなことより、役に立つわよ私」

「信用できない」

ヒロは厳しい態度を崩さなかった。

「どうしたら信用してくれるの？」

「そうだな、そちらさんの情報を流してくれたら信用してもいい」

「いいわ、決まりね」

禎は少しほつとして、にっこり笑った。

朝食が終わり、ヒロとアリアがそれぞれ出かける準備のため部屋に引っ込むと、キッチンで後片付けをしながら柚子が禎にそつと訊いた。

「ねえ、あの二人の何を知っているの？」

「半分はったり」

禎は舌を出して肩をすぼめた。

「少しは知っているの？」

「知りたい？」

禎はもつたいぶるように、一呼吸間をおいてから、話しを続けた。
みはらひろがす

「美原博一という資産家の息子が失踪というか家出しているの。それがヒロさんではないかしら」

それは柚子も知っている情報だった。禎は悪い人間ではないと柚子は思っていたが、アリアたちに何らかの形で迷惑をかけてしまわないように、知らないふりをした。

「はつきりしないの？」

「その息子の名前は弘文^{ひろふみ}。ヒロさんが息子に違いないと思うのだけれど、一つだけ当てはまらないことが……美原博一の子供は一人だというの。でもヒロさんとアリアさんは兄弟なのよね？」

「じゃあ、それはヒロとは違うんじゃない？」

「それがね、まだ不確かなんだけど美原博一にはもう一人子供がいたという情報があるの。その子は、別の場所で育てられていたらしいの。ということは、隠し子かしら？　それがアリアさんなのかも」

アリアは隠し子ではない。だが、妻のななと矢萩孝介との仲を疑っていた美原博一が、アリアを我が子と認めていなかったとしたら、不倫の結果、生まれてきた子供。夫の子供として育てる母。自分の子供ではないと疑う父。

子供はなぜ自分が父から疎まれているかわからない。

アリアは多分、そんな子供時代を送ったのだ。

柚子はそんなふうに想像しただけで、目頭が熱くなった。

「ふうん。でも、それって別人じゃないの？」

柚子は洗い終わった皿を片付けながら、涙声にならないように注意して言った。

「でも、お姉ちゃんが調べて……。でも、私はそうだと思うわ」

禎は言いかけた言葉を途中で変えた。

お姉ちゃんが調べた。

柚子は聞き逃さなかった。禎にはお姉さんがいて、そのような情報を手に入れることができる職業なのだ。

警察か、興信所か。

柚子は禎のことを少しばかり警戒した。

一方、口うるさい柚子と禎を何とかマンションに残し、アリアとヒロは車で出かけたのだった。

重いアタッシュケースを一つ積んで。その後ろにはしっかり尾行の車がついている。音江槇と東十無刑事だ。

「あのお二人さん、ぴつたりついてくる」

ヒロがバックミラーをちらりと見た。

「昇がない、どうしたのかな」

「おまえ、あいつらのこと名前で呼ぶのはやめろ。そんなに親しいのか」

「そういうわけじゃないけれど、双子だしつい名前で呼んじゃうんだよね」

「刑事は刑事と呼ばばいい」

「……うん」

「あまりかわるな」

アリアは俯いた。

「この辺りに停めるか。例のケースは重いから俺が持つ。ちゃんとついて来い」

「わかった」

ヒロはアリアの返事を聞かないうちに、街中の雑居ビルが並ぶ一角に車を路駐したかと思うと、するりと車を降りて古ぼけたビルの中へと姿を消した。アリアも慌ててついて行く。

刑事達の車もそれに続いて停まった。

「どうする？ 多分あのビルだと思うけれど」

「音江、この場所は知っているのか？」

「いいえ、初めて。誰かに会うのかしら」

二人が車を降りようとしていると、女が一人、車に近寄って窓をこんこんと叩いた。思わず十無が窓を開けると、同時に勢いよくスプレーガスが車内に充満し、程なく二人は眠りに着いてしまった。

その頃、アリア達は狭く薄暗い階段を上り、以前は事務所だったらしい部屋にいた。

最近慌ただしく閉めたのか、中はまだ机などの備品がそのまま残り、幾つかの段ボール箱には書類らしきものが入り、散乱したままになっていた。

その奥の部屋でアリアはヒロの指示通り、淡いグリーンワンピースに着替えて女性の姿になっていた。

「あいつ遅いな」

ヒロは事務所の窓から外をうかがった。

「つけられていたわよ」

不意に、どこからか女の声がした。

「何処にいる」

二人は辺りを見回すが人影らしきものはない。

「つけられているのなら何とかしてから来てちょうだい。まったく、世話が焼ける。眠らせておいたわ」

まだ姿はないが、聞き覚えのあるハスキーな声。

アリアは今回誰と会うのか、どういう計画なのかは全く知らされていなかった。

「こいつはアリアだ、隠れる必要はない。いい加減出て来い」

「上にいるわよ。ちゃんと見つけなさい」

見上げると天井の一部が開いており、そこからすらりと白い足が見えている。ヒュンとその足が下りて来たかと思うともうアリアの前に立っていた。黒の膝上までのスパッツをはき、派手な柄のＴシャツを着ている。

Dだった。

「ハロウ、アリアちゃん、随分可愛くなっちゃったわね。この前とは大違い、その格好のほうが素敵よ。あの図々しい柚子は元気みたいね」

たじろぐアリア。それにはお構いなくDは話し続けた。

「気をつけなさいよ、あの娘は要注意よ。ワルなんだから」

以前、暗闇の中で聞いた声。

Dと昼日中に間近で会うのはアリアはこれが初めてだった。

ふわりとしたロングヘアを無造作に下ろし、色白の美人でほんのり頬が赤かった。落ち着いた声だったので、アリアはもつと年上の女性を想像していたのだが、実際は二十七、八歳ほどだろうか。「また酒を飲んでいるな、大丈夫なのか」

ヒロは顔をしかめた。

「景気づけに少し飲んだだけよ、ヒロも飲まない？」

何処にあったのか、手品のように水割りの入ったグラスがヒロの目の前に現れた。

「遊んでいないで用事を済ませるぞ」

ヒロは呆れ顔だ。

「つまらない男ね」

そう言つてヒロの顎を指先で撫ぜると、渋々グラスを埃っぽい事務机に置き、ヒロが持つて来たケースを引き取り、中を確認した。

そこには札が三十束ほどと、布袋にダイヤと思われる大きめの石が十数粒入っていた。

Dがそのうちの一束を取りぱらと確認すると、下のほうはただの紙切れだった。次にダイヤも一粒手に取り小さなルーペで眺めた。

「ふん、よくできているわね」

「偽物なの？ ヒロ、もう教えてよ。いったい何をするの」

「そのうちわかる」

ヒロがぶっきらぼうに答えた。

アリアはDとヒロの親しそうなやり取りを見て、疎外感を感じたのだった。そして、胸が熱くなるような感覚が込み上げてくるのを自覚した。

そんな感情は初めてだった。

一行はビルを出てヒロの運転する車で移動した。

「肝心なところは教えてくれない」

アリアはポツリとそう言つて、ヒロの方をちらりと見た。だが、

返答はなかった。

「ヒロ、アリアちゃんだってもう子供じゃないわ。教えてあげたら？」

後部座席からDが見かねて口を挟んだ。

「いいやこいつはまだガキだ」

「もう、ヒロは過保護なんだから」

Dは二人に聞こえないくらいに小さなため息をついた。そして風にそよぐ街路樹を目で追った。

「ついたぞ」

ヒロはぶつきらばうにそう言っていると、ホテルの正面を避け、路駐している車にまぎれるように停車した。

「それじゃあ私は準備をしてくるわ」

Dは例のケースを持ってホテルのレストラン側にある入り口へすつと消えた。

「ヒロ、いつもはこんなに下見や準備なんてしないのにどうして？」

アリアがちらりとヒロの顔を窺いながら言った。

「今回はそう簡単にはいかない」

そっぽを向いたまま答えた。

「他に何かあるの？」

「いいや別になにもない」

ヒロはきっぱりと断言した。

「母さんにも関係があるの？」

「……」

ヒロは無言で、答える気などなさそうだった。

「で、私はいったい何をするの？」

アリアはこれ以上詮索するのは無理だと感じ、話題を変えた。

「お前にはこれを持って行ってもらう」

そう言ってヒロは、上着のポケットから小型の置時計のようなものを取り出してアリアに渡した。

「え？ 爆弾？」

「違う。いいからこれを三階のトイレにでもわからないように置いて来い」

「……」

よく分からないままアリアは車を降りた。

「ひょっとして私はこのためだけに変装させられたのだろうか」

ぶつぶつ言いながら、アリアは実行してきた。

「ご苦労さん、じゃあ帰るぞ」

「Dは？」

「ここに残る。心配するな、大丈夫だ」

アリアは口答えもできず「ふうん」と、生返事をするしかなかった。

「食事でもして帰るか」

「でもきつとマンションで柚子たちが待っているよ」

「二人で適当にやっているさ」

「……」

アリアはヒロがこの格好をさせた理由がはっきりわかった。食事に出かけるためだと思った。

5・アクシデント

東十無は、自分の体がびくりと動いてとび起きた。

「俺は、どうしたんだった？　アリアを追いかけていて……。こんなところでじっとしている場合ではない！」

十無は、まだぼんやりしている頭を強く横に振ってから、運転席にいる音江榎を揺り起こした。

「おい、起きろ、榎！」

「え？　あらっ私寝ちゃった？」

Dのスプレーで眠りこんでしまった音江榎がようやく目を覚ました。あれから一時間ほど経過していた。

「逃げられたな」

「そうね、でもとりあえずグランドホテルに行ってみましょう」

音江榎は、アリアたちが次に起こす行動を把握していたのか、逃げられても、妙に落ち着いている。

「ホテル？　何か手がかりがあるのか」

「ちよつとね」

「どこからの情報だ」

「ひみつ」

「ちえっ」

十無はその情報に半信半疑のまま、音江榎と共に、グランドホテルへ向かった。

ホテルの正面へ車を着けてドアマンに不審な女性を見かけなかったか訊ねていると、エレベーターから女性が一人降りてきた。

二人を見つけるとその女性は一瞬、逃げるそぶりをした。

十無と榎がそれに気づくと同時に、その女は慌ててエレベーターへ引き返した。

「Dか？　待て！」

咄嗟に十無は追いかけてよとするが榎に引っ張られる。

「だめよ、まともに追いかけてどうするの。今捕まえられたら困るの！」

「そんなこと言っても、逃げられたら元も子もないだろ！」

そう言ったが早いのか、十無はエレベーターのとまった階を素早く確認して、勢いよく階段を駆け上った。槇も仕方なくそれについて行く。

四階に着いたものの、客室のドアはどれも整然と閉まっていて、Dが逃げ込んだ形跡はなかった。

「見失ったか」

息を弾ませながら十無は周囲を見回した。

「もう、待ってよ」

少し遅れて息を切らしながら、槇がたどり着いた。

二人は暫く廊下をうろろしてその場で様子を伺ったが、手がかりも見つけられず、仕方なく引き返したのだった。

同じころ、東昇は一人マンションに残って隣を窺っていた。

「柚子ともう一人いるようだ。安アパートと違って会話は聞こえないか」

壁に聞き耳を立ててみるが、早々に諦めてソファに寝転がっていた。そうしているうちに昇はとうとうと眠り込んでしまった。

暫くして、何やら良い匂いがして昇は眼が覚めた。

「あつ、しまった！」

寝ぼけながら、慌てて飛び起きると、目の前には柚子がいた。それも笑顔で。

「お目覚め？ もうお昼よ、お腹空いたでしょ。アリア達昼食食べて帰るって言うの、それで余ったからお裾分け。食べてねっ」

香ばしく焼けたピザトーストをテーブルに置いた。

「な、何でお前、隣に知っているのか。どうやって入った？」

昇はいっぺんに目が覚めた。

「鍵がかかってなかったわよ。何回かインターホンも押したけれど、出てこないし」

「勝手に上がり込むな」

「怒鳴らないでよ、せっかくお昼持つてきてあげたのに」

柚子はむうつと膨れた。

「そう気安く来るな」

柚子は何を考えているのかわからない。何か企んでいるのかもしれない。昇は警戒した。

「だって、何も悪いことしてないもん。それを言ったら昇達だって、いつも気安くアリアの所へ押しかけて来るくせに」

「それはだなあ……でも最近あまり」

痛いところを突かれ、うーん、と唸ったまま昇は考え込んでしまった。

「もついいよ、ほら冷めないうちに食べて」

柚子にせかされ、昇はピザトーストをかじった。

「じゃあまたね」

「待てよ、お前の他に若い女の子がいるな」

「うん、禎のこと？」

「そいつは何者だ？ 苗字は」

「知らない、私の友達だけれど」

「サチか、どこかで聞いたことのある名前だな」

昇は最後の一切れを口に放り込み、うーんと唸った。

「昇の知り合いにサチって言う人いるの？」

「知り合いというか……」

「じゃ、事件がらみ」

「いや、人違いかな」

「あーもう、はつきりして！」

柚子はため息をつき、部屋を後にした。

「そつだ、確か音江禎の妹がそんな名前だったような、でもまさか」

東十無と音江榎はDを見失い、肩を落としていた。

「きつとまたここへ現れる。ここで様子を見ましょう」

「随分確信があるんだな」

「まあね」

二人はエレベーターでロビーに降りた。

「私の情報では二十時に何かが起こるらしいの。でも何のことなのかは……ねえ、あれ」

禎が指差した方向に『青崎幸造個展祝賀会』と大きな看板が立てられていた。

「他にはイベントがないかホテルに確認しよう」

フロントに警察手帳を見せ、尋ねてみたが他には大きなイベントはないとのことだった。

「でも十九時からとなっているわ」

「始まりの時間とは限らないだろう。そろそろ情報の出所を教えろよ、信用していいのか？ 全く見間違いだったら大変だからな」

「Dがこのホテルに現れたのがいい証拠よ。間違いないわ、きつと今夜ここで何かが起こる」

「でもこれだけの情報で、所轄が動いてくれるかな」

「呼ばなくていいわよ、何か犯罪が起こるという確証はないし。警察はまだ動かないでいてくれたほうがいいの」

「またお前の都合か、Dが現れたことは報告するぞ」

「仕様がないわね」

不満そうに禎が口を尖らした。

「祝賀会のことと詳しい情報を取ったほうがいい」

「その前におなかすいた」

「つてなあ、夜までそう時間がないぞ」

「でももうふらふら、お昼食べそびれたから」

「じゃあ、そのレストランで軽く食べよう」

二人は目の前にある一階ラウンジに入った。

ウェイターに席を案内されて、ゆったりした椅子に腰をおろした。

吹き抜けで天井も高く、大きな窓から日差しが入り開放的だが、厚いカーテンが下がり全体が重厚な造りで高級感があった。

「こんなところには縁がないな」

十無が居心地悪そうにしている。

「落ち着かない？ 実は私も」

禎はくすつと笑った。

ウェイターが水の入ったワイングラスを置いた。二人ともサンドイッチを注文した。

「サンドイッチで足りるのか？」

「喉に通らないような気がして、ラーメン屋にでも行けばよかった」
「彼氏とデートでこういうところに来るだろう」

「彼氏なんていないもの、こんな仕事じゃあね。十無こそどうなの」
「禎と同じさ」

「昇はどうなの？」

「いるわけないだろ」

「そうよねえ、前にもちょっと聞いたけれど、昇ってあの泥棒と一緒にこっちに来て行動していたのよね。一体どういう関係？ なんだか、その少年のことが……好きみたい」

禎は聞きづらそうに口に出した。

「はは、そうかも」

十無は少し困った顔をして、自分に確認するようにそう言った。

「そっかあ、男の子に負けちゃうかなあ私。ちよっとショック」

「禎、もしかして昇のこと……」

「あ、今は聞かなかったことにしてね。それより、ひょっとして十無もその少年が好きなの？」

「お、俺は違う！」

十無は慌てて否定した。

「怪しいわね、まあいいけれど」

禎は疑っているように言った。

「そうだ、署に連絡するのを忘れていた」

話をそらすように、十無は携帯電話を懷から取り出した。

「もう、もつと訊きたいのに」

槇は運ばれてきたサンドイッチをほおばりながら、十無が電話をしている最中、ずっと文句を言っていた。

「……単独行動をするなど起こられたよ。でも、若干名来てくれるそうだ」

十無は携帯電話を内ポケットにしまった。

「あら、警察が来るの？ やりづらいわね」

「槇が持っているアリアの情報、きちんと聞いていないが、本当に何か知っているのか？」

「もちろん。でもこの祝賀会終わってから教えるわ」

「俺の方がなんだか不利だな」

「そう？」

軽食を取り終えると、祝賀会開催者に警備のことを説明するため、十無は所轄刑事と合流した。槇は昇を迎えに行き、祝賀会会場へ戻ってくることにした。

6・警備

十七時過ぎ、グランドホテル内を十人ほどの私服警官が見回り始めていた。

「Dは本当にここへ来るだろうか」

音江槇と一緒にホテルへ到着した東昇は、ロビーを見回した。

「きつと来るわ。それに祝賀会主催者である青崎氏の友人の美原夫妻は、結構な資産家で、夫人はいつも高価な宝石を身につけているそうよ。今夜も派手に着飾ってくるんじゃないかしら」

「美原夫人の装飾品が狙われるというのか」

「あくまでも推測だけれど、その確率が高いと思うの」

「美原って、もしかして美原工業の美原博一か」

「知っているの？」

「柚子の父親、矢萩がよく取引をしていた会社の社長で、美原は矢萩の死に関係があるかもしれない人物だ。動機はわからないが」

「今回もそのことに関係があるの？」

「わからない、でも何らかのつながりがあるような気がする」

「とにかく、美原夫妻から目を離さないようにするかなさそうね。今度は居眠りしないでね」

昇は、マンションでつい眠り込んでしまったことを、素直に槇に言っただった。

「悪かったよ、嫌味を言うな」

「ほんとに、しっかり仕事してね。減給するわよ」

槇はスプレーで眠らされてしまったことは言わずに、昇の頭を小突いた。

「わかってるよ、主催者の美原博一の方は十無がついているから、俺達は夫人の方をマークだな」

二人は会場をぐるりと見回ってから、ロビーで美原夫人が到着するのを待つことにした。

十八時、黒塗りのタクシーがグランドホテル前に到着した。

ドアマンが後部ドアを開けると、黒いドレスの女性が降りた。

スリムな体型がよくわかるスリット入りの黒いドレス。ボリユームのある胸元には大粒のダイヤのネックレスをしていた。

少し緊張した面持ちのその女性は、ひときわ華やかで人目を引いた。

「あれが美原夫人よ。目立つわね、彼女。愁いを帯びた美女って感じ」

槇がため息を漏らす。

「だけどそんなに若くないはずだ。二十歳過ぎの子供がいて、四十代だったかな」

「えっ、だってあの体型で？ 女優並！ きっとかなりお金をかけているんでしょうね」

槇は昇の言葉にまたまたため息をついた。

「聞き込みでは、美原夫人の良い噂は聞かなかった。遊び歩いていてよく家を空けることが多いとか」

「いいご身分ね」

元結婚詐欺師のなな…… もっとけばけばしく派手なのかと昇は想像していたが、楚々とした感じすらする夫人を見て、意外な印象を受けた。

もっとも、思わず守りたくなるような女性のほうが、男も放っておけない気持ちになるのかもしれない、などと昇は思った。

二人は美原夫人の後を追って会場横にある控え室の前まで来ると、ドアが開け放しになっていて、男の苛立った声が聞こえてきた。

「帰ってくれ、一度断っただろう」

「そう言われても、Dが万が一現れたら危険かと」

どうやら、所轄の刑事と十無が美原博一と警備のことで揉めているようだった。

「警備員を配置している、心配は要らん。Dだかなんだか知らんが、こつ警察にうるうるされたらせつかくの祝賀会が台無しだ」

「警官は総て私服にしていますから」

「必要ない、お引取りいただきたい」

美原は一步も譲らず、とうとう二人の刑事は部屋を追い出された。ドア付近で中を伺っていた美原夫人は、刑事たちに軽く会釈をし、控え室に入ってしまった。

「これ以上は無理だな」

年配の刑事は顔をしかめた。

「すいません、無駄足させてしまって」

十無は申し訳なさそうに頭を下げた。

「いいや、普通はあんなに拒否はしないものだが。何かありそうだな」

「ホテル周囲に警官を配置するしかないですね」

「じゃあないな……おやあんと同じ顔だ」

年配の刑事は少し離れた壁際にいる槇と昇が、近づいてきたのに気づいて言った。十無と昇の顔をまじまじと見比べている。

「どうも、双子の弟の昇です」

「ああ、こんにちは。へえ、彼女連れか」

「彼女じゃありません、仕事の同僚です」

槇はすぐさま訂正し、名刺を渡した。

「ほう、探偵さんかい。何か仕事で？」

「ええちよつと。美原夫妻は警察の警備を断ったのですか」

「警備員がいるからいいそうだ。我々は念のため外に待機しようと思っている」

顔をしかめ、やれやれとため息混じりに年配の刑事が言った。

「俺も外回りを警備するから。昇、またあとで。何かあったら連絡しろ」

「そっちな」

昇にそう言っ、十無達は慌ただしくホテルを出ていった。

十八時五十五分、祝賀会会場はかなり混雑しており、人の出入り

も激しくなってきた。

「きつとここね。どこにいるのかしら、アリアさんたち。きつと変装しているだろうからわからないかしら」

淡いピンクのタイトドレスに、薄化粧をした禎が会場に入っている。その後を柚子がこっそり尾行し、続いて会場に入ろうとしたが警備員に呼び止められた。

「お嬢さん、未成年者は入れないよ」

「えゝだってパパと来たのに」

柚子は思いつきり甘えた声を出したが、警備員はだめの一点張りだった。

「その娘、私の妹なのいいでしょ」

禎が戻ってきて、間に割って入った。

「禎……お姉ちゃん」

「うゝん、じゃあアルコールはだめだよ」

警備員は渋々通してくれた。

「なんだ、禎さん尾けていたこと知っていたの」

「勿論」

「このことどうして知ったの？」

「実は、ヒロさんの寝室にあったメモを偶然見ちゃって、このホテル名と二十時って書いてあったのが気になって、色々調べたら今日はこの催ししかなかったから」

「さつき、昇や十無、それに音江っていう探偵も見かけたけれど……もしかして禎さんその情報流した？」

「……ちよつとアルバイトで、ごめんね」

禎は両手を合わせて申し訳なさそうにしている。

「ひどい、探偵とグルなの？ 言っていたこと全部嘘だったの？ せつかく仲良くなれたのに」

「嘘じゃない、柚子ちゃんのこと友達だと思っているわ」

「アリアたち捕まっちゃうかもしれないのに」

「でも、そう簡単につかまらないわ、きつと」

禎は樂觀的だったが、柚子はかなり不安になった。

アリアたちは刑事や探偵が、ここをかぎつけていることを知っているのだろうか、柚子は心配になった。

「じゃあ、アリア達を守るのを手伝って」

「……わかったわ」

柚子の不安そうな表情に、禎も少し動揺したようだった。

一方、昇と槇は、会場で不審な動きはないかと目を光らせていた。

「地方の一画家の個展祝賀会にしては大掛かりだな」

「なんだか地元の市議やら経済界の人ばかり、裕福な友人が多いるようね」

二人が話し込んでいると、紺色のドレスを着たロングヘアの若い女性が、昇のすぐ側をすれ違った。

昇はその女性と眼が合い、女性はにっこり微笑んだので、昇は思わずつられて微笑み返した。

「なにをにやけているの」

槇はそう言って昇を肘でつついた。

「べつに……」

「ああいう娘が好みなの？」

「いや、そういうわけじゃ……どこかであったことがあるような」

「女の子には皆そう言っているんじゃないの」

「違うって」

「そう？」

槇は面白くなさそうだった。

「あーびっくり、昇が目の前にいるんだもの。Dとヒロは何処にいるのかな、なんだか私だけ蚊帳の外だ」

紺色のドレスの女性は変装しているアリアだった。

会場を出たところで、アリアの携帯電話が鳴った。

「ヒロ？」

「おまえ、なぜそこにいる。部屋で待っていると言ったはずだ」

「だって何も教えてくれないんだもの」

「とにかく今すぐそこから離れる、いいな」

「でも……」

アリアが話し終わる前に電話は切れた。

「勝手すぎる！　いいよ、こっちも勝手にするから」

切れた携帯電話に向かって、言い足りなかった文句を言っている
と、会場から大きな拍手が聞こえてきた。

「それでは、青崎氏の個展を開催するにあたり、影ながら支援
をされてきた美原夫妻に青崎氏より絵画が贈呈されます」

「美原？　まさか……」

アリアは会場に戻ると、目は壇上の一点に釘づけになった。

美原夫妻が、青崎幸造から冬景色が描かれている大きな額絵を受
け取っている。

「母さん……そんな、ヒロは一言も……私に黙って」

アリアはその場に立ち尽くした。

アリアの衝撃をよそに、壇上では、美原博一が誇らしげにスピー
チをしている。

「ありがとうございます、しかしこの絵は多くの方々に観て頂きた
い。そこで、市議の佐藤良男先生に託し、公共の施設に展示しても
らうことにします」

五十代くらいで中肉中背、爽やかな印象の佐藤良男市議が、壇上
に上がり額絵を美原博一から受け取ると、再び会場から拍手が上が
った。

「この貴重な絵は私、佐藤が責任を持って保管致します。これから
も市民の皆様のため、一生懸命働かせていただきます」

議員特有の貼り付いたような機械的な笑みを浮かべてそう言った
後、自分のアピールもしっかりと話していた。

驚いているのはアリアだけではなかった。柚子もまた、美原夫妻
を目の当たりにし、顔色は青ざめ、怒りで震えていた。

「顔も見たくない人達と、こんなところで会うなんて。のうのうと

生きているあいつ等を許さない」

「柚子ちゃん？」

穏やかな表情の柚子しか知らない禎は、何か背筋が寒くなるような感覚に襲われたのだった。

「あの額絵、何か変。警備員が二人もついている。美原なのネツクレスが狙われる可能性が高いと思ったけど、もしかして、Dに狙われているのは額絵かも」

柚子は美原夫妻の方をじっと凝視したまま呟いた。

「あまり高価ではなさそうだけれど」

禎は柚子の言葉に半信半疑のようだった。

「そうね、でもあれに違いないわ」

柚子はそう断言した。

「ねえ、柚子ちゃんちょっとトイレに行ってきた方がいい？ 緊張してきた」

「じゃあ一緒に行く」

「逃げたりしないわ」

「……わかった、信じる。ここで待ってる」

禎が側の化粧室に行ってから一、二分もしないうちに、化粧室から悲鳴が聞こえ、続いてもうもうと煙が出てきた。

「禎さん！」

柚子が悲鳴に似た叫びを上げた。

「柚子か？ 知り合いがいるのか。危険だ、俺が行く。ここにいろ」
柚子の叫び声を聞きつけた昇が、ハンカチを口に当てて化粧室に走った。

化粧室には禎が煙に巻かれて動けずにしゃがんでいた。他には誰もいなかった。

「大丈夫か、一体何が起こった？」

「うっ、わからない。目があけられないの」

禎は咳き込みながら涙を流している。昇は禎を抱えて化粧室を出た。

煙はどんどん会場内にも流れ、避難しようとする人がエスカレーターへとつめかけ、既にパニック状態に陥っていた。どうやら会場内においてあったお祝いの品からも同時に煙が上がったようだった。「皆さん落ち着いて走らずに非難してください！」

ホテルの外で待機していた警官が誘導を始めた。

十無が会場に駆けつけたときには、ステージ上で美原博一が倒れていた。

「美原さん！ 大丈夫ですか」

「ああ、驚いてよろけただけだ。それより刑事さん、絵は無事か？ 十無が起き上がるのを手伝うと、美原はよろけながら額絵を確認し、大丈夫だとわかると落ち着きを取り戻したようだった。

「奥様は？」

「警備員が、避難させてくれたようだが」

「すぐに奥様の無事を確認してください」

「ああ、わかった」

近くにいた警備員に確認すると、誰も美原夫人を避難させていないとのことだった。

「どういうことだ」

美原の顔色が変わる。

「まさか、Dが誘拐を？」

「男の警備員だったぞ」

「じゃあ、ヒロの仕業か？」

「誰だそれは」

「共犯者です」

「頼む、早く妻を取り戻してくれ！」

楨が十無の姿を見つけ、駆け寄ってきた。

「いったいどうなってるの？」

「美原夫人が姿を消した」

「なんですって！」

「後は俺達警察に任せて、非難したほうがいい。昇は？」

「さつき、化粧室から悲鳴が聞こえて、そっちへ」

煙の中に、昇が禎を抱えた姿が見えた。柚子も一緒だった。

「十無、この娘がトイレで煙に巻かれていた。病院へ搬送してもら
うよう手配してくれ」

「あれ？ 禎じゃないの。どうしてここに」

禎は昇に抱きかかえられている娘を見て驚いた。

「ごめん、お姉ちゃん。面白そうだからつい来ちゃった」

「禎って、禎の妹か！」

昇はあっけにと取られている。

「探偵さんの妹！ そう言えば似ているかも」

柚子も驚いている。

「妹の禎にうまくもぐりこませて、探らせていたの。まさか、巻き
込まれるなんて」

禎はおろおろしている。

「刑事さん、何をごちゃごちゃと！ 早く妻を探してくれ」

美原博一は苛立った口調で、声を荒げた。

「勝手ね、さつきまで警察なんていらないうって言うたくせに」

美原博一のほうを向かずに、柚子が肩を震わせて言い捨てた。

「何だ、この小娘は」

「あなたは覚えていなくても、私は忘れようにも忘れられない。…

…私は矢萩孝介の娘よ」

柚子は美原博一の顔を睨みあげた。

一瞬、美原博一の目が見開き、うろたえたようだった。十無と昇
はそれを見逃さなかった。

「知らんな」

そう言つて、美原博一はふいと額絵を持って控え室へ引つ込んだ。
禎と柚子は禎に付き添い、病院へ向かった。

「昇、俺の勘だが美原一博には何かある、目を離さないでいてくれ。
俺は捜査があるから」

「わかった」

十無が所轄刑事の元へ走って行ったあと、昇は美原博一がいる控え室の様子を探りに行った。時計は十九時五十分を回っていた。ヒロのメモに記されていた時間の、五分前のことだった。

7・連れ去られた美原なな

会場が大騒ぎになっていた頃、美原ななは同ホテルの一室で目隠しをされ、後ろ手に縛られたまま椅子に座らされていた。

「ヒロ、母親を捕まえてどうするつもり？」

美原ななは怯えるでもなく、呆れたようにため息をつき、めんどくさそうにぼそりと呟いた。

「あんたを義理でも母親だとは思いたくないね。俺だと分かって、簡単について来たんだろう？」

「そうよ。わざわざ警備員に扮装して、こんな手の込んだことしなくてもいつだって会うわよ。早く戒めを解きな」

愁いを帯びた美女は何処へやら、ななはふてぶてしい大胆不敵な本性を現した。

「それはできない、あんたは危険だからな」

「か弱い女を捕まえておいて何を言ってるんだか」

「よく言うよ、百戦錬磨の詐欺師が」

「ふん、あんたにいわれたくないね。で、あの子はいつ来るの？」

「今は来ない」

「会えると思ってついてきたのに」

「訊きたいことがある」

強い口調で美原ななの話を遮った。

「な、何よ」

ヒロの厳しい言い方に美原ななは一瞬たじろいだ。その時、ドアが開きアリアが部屋へ入ってきた。

「ヒロ、どうして私に黙って……うつ」

咄嗟に、ヒロはアリアの顔をガーゼハンカチで覆った。途端に、

アリアはヒロの腕の中に崩れ落ちた。

「つけられていたか」

ヒロは苦虫を噛み潰したような顔をして、アリアを抱き上げると

そつとベッドへ寝かせた。

「あの子が来たのね、一体何をしたの？」

目隠しをされていたなにも、アリアだとわかったようだった。

「あんたには関係ない」

「何を言うの！ 会うために来たのに」

「まだ会わせない。あんたの口からきちんと確認してから考える」

「何よ、もったいぶらないで」

「この前、冬に会った時に俺が聞いたことは本当なのか」

「え？ ああ、あの子とあんたが異母兄妹だってこと？ それがどうかしたの」

「矢萩が父親ではないのか？ 本当に美原がアリアの父親なのか」

「へえ、やっぱりあの子のこと好きなの？」

弱みを握ったかのように美原ななはやりとした。

「いいから答えろ」

「そうねえ、はつきり言つて……よくわからないわ」

ななは口元に薄笑いを浮かべた。

「ふざけるな」

「本当よ、当時私は二人とも詐欺の力モだった。美原と矢萩どちらとも付き合っていた。どっちにしろ、私がまた美原と復縁したからあなた達は兄妹ね。まさかあんた、あの子に手を出したんじゃないでしょうね。血がつながっている異母兄弟かもしれないのに」

「……悪魔め！」

「手を出した、の？」

さすがに、ななも驚いたような声を上げた。

「俺はあいつが好きだ」

「あの子を返して。美原も自分の子とやっと認めてくれたのよ。これからは何も不自由させないわ」

「嫌だ、あんたの都合でどれだけあいつが辛い思いをしたのか分かってるのか？」

ヒ口は話しているうちに怒りが募り、腕組みして落ち着きなく狭

い部屋を行ったり来たりした。

「仕方がなかったのよ。美原は矢萩の存在を知ってから、あの子が矢萩の子ではと疑って、いつも冷たい目で私を見るから。どうしようもなくして美原について、矢萩の子だって言ってしまった。美原と離婚して、矢萩とやっと一緒になったのに、矢萩は事故で急死してしまっし」

「何もかも、あんたが矢萩と浮気したのが原因だろう？」

「浮気じゃないわ。矢萩のことを本気で好きになってしまったんだもの、仕方がないじゃない。でも矢萩には妻がいたのよ。だから、美原と一緒にいるしかなかったのよ！」

「仕方ないで済ませるな！」

ヒロは美原なのその言葉でとうとう苛立ちを抑えきれなくなっ
た。

「人の気持ちなんてそう都合よくは行かないのよ」

ななはふと、ヒロを諭すように呟いた。

「とんだ邪魔が入った」

同時刻、美原博一は控え室に入るとそう呟き、部屋で待っていた男の側で、用心深く小声で話した。

「警察が……危険じゃないか？ 日を改めたほうがいいような気がするが」

「あなたの妻の誘拐騒動でどさくさにまぎれてかえってやり易いですよ」

中肉中背で四十代くらいのその男は、紺色のスーツを着込み、丁寧な言葉遣いではあったが、鋭い目つきで相手に有無を言わせない雰囲気でした。

「しかし、誘拐されるとは……一体誰が」

「さあ。それよりさっさと例のものを」

「わかった」

男に促され、美原博一は手元にある額絵を差し出した。

「この中に現金と心ばかりのダイヤが入っています。例の工事発注の件くれぐれも宜しくと先生に……」

「わかっています。先生も美原さんの支援には大変感謝していますよ」

男は事務的にそう言うつと、額を受け取った。

と、同時に額縁から白い煙が勢いよく噴出した。

「なんだ！ これは」

「一体どうなっているんだ」

男は背広の袖で口を覆って後ずさりし、美原は突然のことに驚き呆然としている。

「どうしたんですか」

美原をマークしていた昇が大声を聞きつけ、部屋へ飛び込んできた。

「誰だ！ 勝手に入るんじゃない」

美原はまだ煙が出続けている額を慌てて隠そうとした。

「額縁から煙が？」

昇は美原に構わず額を手にとった。煙には害はないようで、ひたすら白い煙が出てくるだけだった。

「きみ、額を返しなさい！」

そうしているうちに、煙はどんどんホールにも流れていたため、間もなく十無も駆けつけ、こっそり部屋を出ようとした男と鉢合せした。

「あなたは確か佐藤義男市議の秘書？」

「ああ、刑事さん」

秘書は気まずそうに愛想笑いをしている。

「何の騒ぎです」

「別に何も……」

秘書はしどろもどろに答えた。

「十無、この額に札束とダイヤが……」

昇が額の裏側を剥がし、中にあったものをテーブルに広げていた。

「美原さん、これはなんですか。どういふことが署のほうで説明を
それにあなたにも一緒に来てもらいます」

十無はこの場から離れたがっている秘書にも釘をさした。

「自分の妻がいなくなっているのに、何の密談をしていたのやら」

数人の警官に連れられていく二人を見送りながら、十無が呟いた。

「昇、美原夫人は見つからないのか？」

「避難騒ぎではつきりは分らないが、ホテルから出た形跡はない
ようだ。まだどこかにいる可能性が強い。今手分けして各部屋の確
認にあたっている」

「俺もついて行っればいいか？」

「ああ」

二人は一緒にホテルの部屋をまわり始めた。

「誘拐にしては変だ、ヒロが美原の息子だとしたら母親を誘拐する
だろうか？」

ホテルの廊下を歩きながら昇は唸った。

「一体何がなんだか俺にはさっぱり分かん」

十無も頭を抱えたのだった。

ヒロは渋い顔をして美原ななに質問していた。

「音江と言っ探偵を雇ったのはあんただろう？」

「そうよ、あの探偵はあの子を追っている東と言っ刑事と知り合い
なんでしょ？ だから、きつとあの子の居場所も分かると思って」

美原ななの懨然とした態度はヒロを一層苛立たせた。

「あんたのおかげでこっちは動きづらくて、ひどい目にあっている」
ドンドン。

突然ドアがノックされた。

「警察です、今不審者を探しています。部屋を拝見させてください、
ご協力お願いします」

十無の声がドア越しに聞こえてきた。

「刑事か！」

小さく叫んだヒロは、舌打ちした。

ヒロの予想より、警察の動きが素早い。東刑事たちに情報をつかまれていたのだろうとヒロは考えた。

「いいわ、私に任せて。だから早く戒めを解いて」

「何をするつもりだ」

「信用して、悪いようにはしないわ。あの子がいるのだから」

「あんたを信用しろと言うのか？」

そうは言ったがヒロに選択する余地はなく、ななの目隠しと手首の紐を解いた。洗面所に隠れようとしたヒロに、ななは首を横に振ってその場にいるように指示した。

「誰かいませんか？ 失礼して合鍵で入りますよ」

「ごめんなさい。出るのが遅くなって」

美原ななはドアを開けながら十無に向かって微笑んだ。

「美原夫人？」

十無と背後にいた昇は、狐につままれたような顔をした。

「あら、どうかしたのかしら？ それで、不審な人はまだ見つからないんですの？」

ヒロと話しているときとは別人のように、美原ななは完璧に、上品な夫人を演じていた。

「誘拐されたのではなかったのですか」

「誰か誘拐されたの？ 怖いわねえ」

十無の鋭い視線が、とぼけたことを言っている美原ななの背後の人影を捉えた。

部屋の奥に、ヒロの姿を見つけたのだ。

「ヒロか！」

十無はそう言うが早いか、ななを押しつけて部屋に乗り込んだ。

「え？ ああ、弘文^{ひろふみ}のこと？ 息子がどうかしました？」

間の抜けた夫人の言葉に、十無と昇は口が開いたままになった。

8・苦悩

「息子……」

十無が鸚鵡返しに言った。

双子は、まさか夫人から開けっぴろげに暴露するとは思っていなかった。まったく予想外の返答。

その二人以上に動揺していたのはヒロだった。

「余計なことは言うな」

ヒロはななにそう言っただけで目配せしたが、ななはそれを無視し、話すのを止めようとしなかった。

「夫の連れ子ですから義理の息子になりますの。知り合いましたか？」

「まあ、ちよつと……」

まさか、追っていた被疑者だとは言えない。十無は言葉を濁した。「刑事さん、ひよつとして私を探していました？　ごめんなさいね、お騒がせして。偶然久しぶりに会ったものだから、つい話し込んでしまつて」

「そうでしたか。ところで、ご主人が佐藤市議の秘書へ大金を渡していたことが発覚しましてね」

少し落ち着きを取り戻した十無は、刑事の目に戻り、探るようにななを見つめた。

「ええっ！」

ななに動揺が見られた。事情は全く知らないようだ。

「署に来ていただいて、事情を窺うことになっています」

「私も直ぐに警察へお伺いしますわ。じゃあ、弘文、また今度じっくりとお話しましょう。あの子のことも」

ヒロに向かって意味ありげな含み笑いをし、部屋を出た。

「昇、ヒロから事情を聞いてくれ。俺は美原夫人を署に連れていかなければならない。頼むぞ」

そう素早く昇に耳打ちし、十無もななに同行して部屋を出た。

ヒロに向かい合い、昇は強い口調で切り出した。

「何を企んでいる？」

「これ以上俺達のことに関わりたくはない、さっさと立ち去れ」

ヒロがそう凄んでも昇は動じなかった。

「美原弘文がおまえの本名だな。そこに寝ているのはアリアだろう？ この騒ぎでも起きないのはどういうことだ」

「探偵に答える義務はない、あんたには関係のないことだ」

「関係ある、アリアのことは何でも知りたい。……俺はあいつが好きだ」

「双子だと好みまで同じか。だが、あいつは男だぞ」

「……どうだろうと好きだ」

「だが、アリアにとって迷惑なだけだ」

「お前に言われたくない、いつもアリアを束縛しているくせに」

「そうじゃない、守っているだけだ」

「そうかな。ヒロ、お前だって俺と同じで一方的に想っているだけだろう。アリアは『兄のヒロ』に慕っているだけだ」

「うるさい！」

ヒロは凄しい形相で、昇のワイシャツの襟線りを掴み、怒鳴った。

「離せ」

「お前に何がわかる、お前と一緒にだ？ ふざけるな！ アリアと

俺は……俺の苦しみがわかるか？」

「苦しみって？ 何だよ」

ヒロは苦渋の表情で、壁を拳でドンと叩くと、無言のまま部屋を出て行ってしまった。

昇はベッドに眠り続けている女性姿のアリアと二人、部屋に残されたのだった。

ベッドに横たわるアリアの枕元に、昇はゆっくりと近づいた。

閉じられた瞳に、長いまつげが降りている。きれいに化粧された顔はどう見ても女性だった。

「おい、アリア起きろ」

昇がためらいがちにアリアの肩をそつと揺さぶった。

「う……ん、ヒロ……母さんは？」

ようやく気がついたアリアは、頭を抑えながら上体を起こした。

アリアの長い髪が肩に揺れた。

昇の目の前にいるのは、まだ幼さの残る愛らしい女性だった。昇は勤めて冷静に声をかけた。

「大丈夫か？」

「昇？……ヒロは何も教えてくれない」

「え？」

「いや、なんでもない」

アリアは頭が朦朧としていた。うつむいているアリアの瞳に、一瞬、涙がにじんでいるように見えた。

昇の視線に気がついたアリアは、座ったまま頭から布団をかぶってしまった。

「……一人にして」

布団越しにアリアが言った。

「お前、眠らされていたのか？」

「……ヒロはきつと、会わせたくなかったのだと思う」

「どうして？ 美原ななはお前の母親だろう？」

「……」

昇はアリアが声を押し殺して泣いているように感じ、思わず布団ごとアリアを優しく抱きしめた。

「昇……」

「何も言わなくていい、気が済むまでこうしている」

昇は愛しそうにアリアの頭を優しく撫ぜた。

ゆつくりと時間は過ぎ、二人はいつの間にか眠ってしまい、夜が明けるまでそのまま抱き合っていたのだった。

翌日の昼近く、マンションの一階にある喫茶店で、東十無は署を

こつそりぬけて、昇と出口のない事件の中でもがいていた。

「美原博一が秘書に渡したのはガラス玉と模造紙の札束だった。美原もきよとんとしていたよ」

「どういうことだ？」

「美原夫人は誘拐ではないと言っているし、贈賄容疑も難しいし、『煙』は発炎筒のようなものを使った悪戯ということで処理されて事件性はなくなってしまった」

「すつきりしないな、美原夫人が戻ってきた時、つけていたはずのネックレスがなかったんだろ」

「本人は物騒だからはずしたと言っているが、誰もネックレスを確認してはいない。ヒロをかばったのか？」

「現金だつてすりかえられたに違いないし……」

「証拠はないが絶対ヒロとDの仕業だ」

十無はそう断言し、コーヒーを一口飲んだ。

「そうだとでもなぜわざわざ偽物にすり替えたんだろう。盗めばそれで終わりなのに」

「ヒロは親から盗んだことになる、何か意図があるのか」

「捜査はこれで打ち切りなんだろう？」

「そうだ。俺は明日帰らないとならない。ところで昇、おまえ朝帰りしたな。携帯は出ないし、何処にいた？」

「ごめん、ちょっと……」

「アリアか」

昇は十無に問い詰められ、素直に昨夜のことを話した。

「ひ、一晩抱き合っていただよ！」

十無の声が裏返った。

「店の中で大声出すな。放っておけなかったんだ、なんだか可愛そうで」

「だからって、おまえ……」

十無は口をパクパクさせて、言葉にならない。

「でも、気がついたらアリアはいなかった。俺、あいつが心配だ」

「おまえって、いいな。思い通りに素直に行動できて」

十無はつい本音を言った。

「それって、俺が何も考えずに動いているとでもいいいたいのか？」

「いや、そうじゃなく」

「俺だって兄貴の立場も考えている。だけどアリアを今の環境から救いたい」

「そんなことができると思っているのか」

「やってみないとわからないだろう？」

「……俺には出来ないな」

十無はため息をついた。そしてこう言った。

「……頼みがある、このまま旭川に残ってアリアの尾行を続けても少し身元を調べてくれないか。俺は今すぐには休みが取れない、二、三日は何かししようと思っているが」

「いいよ、その代わり……」

「ああ、わかった。探偵事務所の所長には伝えておくから」

「これで心置きなく調査できる」

「一つ言っておく、昨日のようなことは絶対するな」

「なるべく努力する」

「それじゃだめだ！」

真剣に怒ったところで、十無の携帯が鳴った。所轄署からだった。

「……はい、すいません。これから戻ります」

「呼び出しか」

「ああ。じゃ頼んだぞ、今夜はそう遅くならないで帰れると思うが

……」

「後は任せろ」

昇のやる気満々の返事を聞いて十無は苦笑し、「ちょっと心配だ」とぼそりと呟いた。

明け方、アリアは昇の腕をすり抜けたのだった。
アリアはホテルを出ると直ぐ、柚子に連絡して、気がかりだった

禎の状態を確認した。

外傷はなく、念のための一泊入院で大丈夫だと聞き、ほっとした。柚子は付き添いをしているとのことだった。

マンションに帰ったアリアは、テーブルにヒロの走り書きが無造作においてあるのを見つけた。

『黙っていたが以前からななは、お前を探して連れ戻そうとしていた。それで、俺達にかかわるなと警告するために、今回Dにも手伝ってもらい、ちょっとした仕掛をして、サツに灸を据えてもらうよう仕向けた。すぐに帰されるだろうから心配はない。』

Dにはななのネックレスと、手に入れた現金の半分というかなりの報酬を請求されたが。

おまえを別の部屋に待機させてななに会わせる予定だったが、ななと話してやはり会わせたくないと思った。今、ここは危険だ。荷物をまとめてすぐにこのアジトへ来い。俺は先に行って住めるようにしておく』

一番下にはアジトの住所が書き記されていた。

「何が危険だというの？」

ここにはいないヒロに向かってアリアは不満をぶつけた。

また逃げる？ どうして母さんに会わせたくないのか。いい親ではないけれど、会って訊きたい。私の父は誰なのか。柚子とは異母姉妹なのか。

アリアは洋服のポケットから、小さな紙切れを取り出した。紙には旭川市内の住所が書いてある。

それは、ヒロに薬で眠らされ、ベッドに横になっている間にいつの間にか手に握らされていたメモだった。

多分、隙を見て美原ななが居場所を知らせたのだろう。

「ここへ来いということか」

アリアはそのまま立ち尽くし、暫くメモを見つめていたがメモをくしゃっと握りつぶして、ゴミ箱へ投げ捨てた。

「ヒロが会ってはいけないと言っているのには何かわけがある、今

は会わない」

自分に言い聞かせるように、アリアは声に出しそう呟くと、急いで荷造りをしてヒロのいるアジトへ向かった。

9・混乱

その日の夕方、東十無がマンションの駐車場に到着直後、昇から携帯電話に連絡が入った。

「兄貴、ごめん！ アリアの行方がわからなくなった！ マンションにいない。ヒロもいない。空港でアリアらしい人物は搭乗していなかったが、変装していたらわからない」

昇は早口になっていた。慌てているようだった。このままいなくなるのではと不安なのだろう。

落ち着かせるために、十無は穏やかな口調でゆっくり伝えた。

「昇、落ち着け。大丈夫、きっと見つかる」

「探しているけれど、何も手がかりがない」

「わかった、俺も探す」

携帯電話を切った十無が、何気なくアリアの部屋を見上げると窓に明かりがついていた。

「いるのか！」

十無は急いで、エレベーターに乗り込んだ。到着するまでの数秒間がかなり長く感じられた。エレベーターの扉が開くとアリアの部屋まで一気に走ってドアを叩いた。

「アリアいるのか？ 俺だ、ここを開ける」

ドアが少しだけ開き、アリアが顔をのぞかせた。

「十無？」

十無はすかさず足先をドアの間に挟んでこじ開け、玄関に入った。
「なに？」

アリアはサングラス越しに、怪訝そうに十無を見た。

「行方をくまますつもりか」

「……」

「昇がおまえを心配して探している」

「十無は？」

アリアはじつと十無を見つめた。

「お、俺も心配していた」

アリアに予想外のことを訊かれて面食らった十無は、視線をそらして答えた。

「どうして顔を背けるの？ 前に女の姿で会ってからずっと。私が騙したから？ でも、十無をからかったわけでも騙すつもりもなかった」

「そんなことはこだわっていない」

十無はアリアの様子がいつもと違うような気がした。
苛々した態度。攻撃的な言葉。

「本当に？ でも十無は私を避けている」

「おまえ、いやに絡むな。酒を飲んだのか？」

「はぐらかさないで、きちんと答えて」

アリアの頬が幾分高潮している。やはりお酒は多少飲んでいるようだった。

「避けているね」

「……違う」

そう言いながらも十無の目は宙を泳ぎ、動揺していた。
アリアは黙って十無を見つめている。

刑事である自分に、どうしろというのだ。何ができる。

十無の胸が熱くなった。目の前で拗ねるような態度のアリアが可愛いと思った。

十無は不意にアリアの腕をつかんで引き寄せ、抱きしめてしまった。

「俺の前から姿を消すな」

アリアの耳元で消え入るような小さな声で囁いた。

「十無？」

「ごめん、俺は何を」

衝動的な自分の行動を慌てて否定し、アリアを引き離れた。

「刑事は嫌いだけれど、十無は好きだ」

そう言って、アリアが十無の襟首を引っ張って、その頬にキスをした。

「お前、誰にでもこういうことをするな」

十無は自分の顔が赤くなるのがわかった。悟られないように、つい口調がきつくなった。

「嫌だった？」

「そうじゃなくて、そんなことをされたら勘違いを……」

十無は口ごもった。

アリアの携帯電話が鳴って、十無はほっとした。

「柚子？ 禎さんが？ ……わかった、心配しないで。これから連れ戻しに行く」

アリアの声が緊張していた。携帯電話をズボンのポケットにしましながら、アリアは重いため息を吐いた。

「柚子が退院の手続きをしている間に、家族の者だと言う男が来て禎さんを連れ去ったらしい」

「誘拐？ 一体誰がそんなことを」

「私のせいだ」

アリアはすっかり酔いが醒めて冷静になっていた。

「どういうことだ」

「……私一人で来いという内容の手紙が病室においてあったらしい。

……あのひとからの。行かなければ」

「お前の母親、美原ななからか？」

「……」

「俺も一緒に行く」

「だめだ、これは私の問題だから」

「心配だ」

「危険なことはないと思う。それに、どちらにしても会おうと思っ
ていたから」

十無の前に手のひらを差し出して、くしゃくしゃになったメモを見せた。それは、アリアが一度ゴミ箱へ捨ててしまった美原なの

住所が書かれたメモだった。

アリアは一度ヒロのいるアジトへ行ったものの気になって、これを取りにマンションへ戻ってきたところだった。

書かれていた住所は美原なの自宅住所ではなく、山の中腹にある牧場のものだった。

七時をまわり、日も暮れてきていたが、まだ夕焼けが遠くに見えて辺りは明るかった。

のどかな風景が広がっているが、旭川の中心部から車で三十分程度の場所だった。

山道沿いにあるログハウスを何件か通り過ぎ、山の斜面を利用した牧場が見えてきた。道路沿いに目的の建物があり、窓から明かりが漏れていた。小ぢんまりしたログハウスだった。

その側にななが運転してきたと思われる黒塗りの乗用車が止まっていた。

車でなければいけない場所だからと、十無が強引にこの場所まで送ったのだった。

「俺は車で待っている、それでいいか」

「うん」

アリアはログハウスのドアの前に立った。

ポケットには、電源をオフにしたままの携帯電話がある。アリアはヒロに、直ぐ帰ると言って出てきたのだった。

ヒロは心配しているに違いない。アリアは連絡しようとして携帯電話を握ったが、やはりななと話をした後に電話することにした。電話したほうが、ヒロを心配させてしまつかもしれないと、アリアは思ったのだ。

アリアは緊張しながらドアを開けた。

目の前に十畳ほどのリビングが広がった。ソファに美原なのが深々と腰を下ろしていた。

「待ちくたびれたわ。そうちゃん、会いたかった」

そう言っ てななは駆け寄り、アリアを抱きしめたが、アリアは硬い表情でななの腕を振り払った。

「禎さんは何処にいるのですか」

「あの娘はここにはいないわ、私の家でゆっくりしているわよ」

「直ぐに家に返してください」

「そんなに心配しなくても大丈夫よ、丁重に送り届けるから」

「お願いします、関係ない人を巻き込まないで」

「他人行儀な口の聞きかたね、やっとまともに会えたというのに。」

それに本当に男の子のようになっちゃって……」

「そんなの、前からでしょう？ 用件は手短かにしてください」

「我が子にただ会いたいと思ってはだめかしら」

「貴女がそれだけの為に会ったとは思えません」

「ヒ口から何を聞いたか知らないけれど、酷い言われ方ね。母さんはただあなたに帰ってきてほしいだけなの」

ななの瞳に涙がにじんでいるのがわかり、アリアは少し罪悪感を覚えた。

「どうして今更」

「そうちゃんのことをずっと捜していたのよ。復縁した後、美原があなたを引き取ることをやっと許してくれたの」

「でも、私がいると……美原は嫌な思いをするでしょう？」

「美原だなんて、どうしてそんな呼び方を」

「私の父親は矢萩孝一なのでしょう？」

「弘文から、聞いたの？」

「ななの顔つきがきつくなった。」

「ヒ口は美原から聞いたと」

「違うわ、私が初め美原に嘘を……」

「嘘？」

「アリア！」

突然ヒ口が勢いよく部屋に入り込んできた。

「ヒ口？ どうしてここが……」

「お前の帰りが遅いから、もしやと思い、美原の自宅へ行つて聞き出した。禎さんも家に帰した。しかし、誘拐まがいのことまでするとは！」

「弘文、邪魔をしないで」

「アリア、泣き落としなんか騙されるな。こいつはお前に見合いをさせようとしている」

「見合い？」

アリアはヒロが言った言葉をさっぱり理解できないでいた。

「美原工業は今、厳しい経営状況にある。ななはおまえを会社合併の道具に使うとしている」

「弘文、そんなでたらめを」

「アリア、俺が嘘を言うと思うか？ さあ帰ろう」

「そうちゃん、母さんはただ一緒に暮らしたいだけなの。来てくれるわね」

ななは目を潤ませて、今にも涙を落としそうだった。

「勝手に決めないで、私は今の生活を壊したくないから帰らない。でもヒロも私に何も話してくれないから嫌いだ！」

そう言い捨ててアリアは外へ飛び出した。

ドアの側に十無が立っていた。

「聞いていたの」

「心配だったから」

「ここから……離れたい」

十無はアリアを助手席に乗せ、言われるままに車を出した。

無言でじつと外を見つめるアリアが悲しそうに見えたが、東十無はどう話しかけていいのかわからず、黙って運転していた。

F Mラジオからは流行歌が流れ、ただ真っ直ぐな道を街とは反対の方角に走らせていた。

「母さんが凄く会いたがっていることに少し期待していた。親の愛情を期待しているなんて子供かな」

「そんなことはない」

十無はそう言うのが精一杯だった。

「……以前柚子に、私は寂しがりやだと言われた。自分でもそう思う」

「俺が、……いる」

「え？」

「いや、……空港が近いな、飛行機でも見に行くか」

「うん」

アリアは十無の言葉を聞き流した。これ以上十無が自分にかかわると迷惑をかけてしまう、そう思ったのだった。

なだらかな畑のなかで、旭川空港の照明だけが眩しく輝いていた。十無は滑走路側の空港を見渡せる道端に車を停車させた。

「結構綺麗なものだ」

「うん」

最終便の飛行機がゆつくりと着陸し、二人は黙ってそれを眺めていた。

「……小さい頃に母が離婚してから、私はずっと一人だった」

アリアはポツリポツリと話し始めた。

「母の『仕事』のせいで引越しを繰り返して友達も出来ず、母は私を放任していた」

十無は軽く相槌を打ち、静かに聴いた。

「そんな酷い状態の時、ヒロが現れて私を連れ去って救い出してくれた」

アリアは微かに笑った。

「その時は本当に嬉しくて、ヒロが神様に見えた。でも……」

アリアはどう言おうか一瞬迷ってから「でも、安らぐことはなかった」と呟いた。

「今の生活からも抜け出せばいいじゃないか」

「それはできない。ヒロには逆らえない、大事な人だから」

「でも、ヒロから離れたら全て解決するんじゃないか」

「ヒロがいなかったら私はここにいない」

十無はアリアの気持ちが理解しきれずに、困惑した表情をした。

「ごめん、変なことばかり話して。答えなんてないのは判っている、自分で考えるしかないんだ」

アリアは自分で結論を出した。

「帰ろっかな、ヒロと顔をあわせるのはちょっと気まずいけれど」

そう言ってアリアは肩をすくめ、苦笑した。

十無が何か言いたそうにアリアの方をじっと見つめた。

間が持たず、アリアは困って十無に笑顔を向けた。

「なに？」

十無に突然肩を強く引き寄せられ、アリアはそのまま抱き締められた。

「アリア、俺を、頼れ」

「十無？」

ぎこちない言葉と緊張が、アリアにも伝わってきた。

十無の、精一杯の気持ちなんだとアリアは思った。

辺りは空港の照明も消え、遠くに街燈が転々と見えるだけとなっていた。

10・告白

二人は車中ずっと無言のまま、十無は誰もいないアジトにアリアを送った。

「俺は明日東京に帰らなければならないから」

そう言つて、十無は静かに帰つて行つた。

アリアは十無にもう少し側にいてほしいと思つたが、結局何も言えず「そう」と返事をしただけだった。

それから数時間後の午前零時過ぎ、ヒロはアジトに戻つてきた。

「ななを脅して釘をさしておいた。暫くは大丈夫だと思うが、絶対に一人で会いに行くな」

開口一番、ヒロはアリアにきつく言つた。アリアにはそれは『命令』のように聞こえた。

「もう、刑事と行動するな。わかつたか」

アリアは「うん」と返事をするしかかなかった。『服従』アリアの頭の中にその言葉が浮かんた。

ヒロの威圧的な態度は、幼い頃の微かに残つた記憶にある、美原博一のアリアに対する冷たい態度を思い起こさせた。

似ているのだ。ヒロは心配して色々言うのだろうが、アリアは反感を募らせてしまふのだった。

ヒロにそつと抱きしめられても、アリアは寂しさから抜け出せないでいた。

翌朝、午前八時過ぎ、ドアを強くノックする音でアリアとヒロは目を覚ました。

「アリア、ヒロ、いるのはわかつている。ドアを開けろ」

ヒロは玄関前がよく見える二階のカーテンの隙間から、外を確認し、「くそ、あの探偵か」と言つて舌打ちをした。

「アリアが刑事に送つてもらつたりするから、ここが知れてしまつた」

まだ部屋で寝ているアリアに、ヒロは文句を言った。

アジトは住宅街にある二階建ての古い一軒家で、玄関先は雑草が伸びて荒れており、人が住んでいるようには見えない。十無から聞いたのだろう、昇はこの場所から離れそうになかった。

ヒロは騒がれても困ると思え、すぐに階段を駆け下りてドアを開けた。

ヒロは「うるさい、さっさと入れ！」と言うが早いか、昇の腕を驚掴みして、玄関に引き入れた。

「痛って〜！ 全く乱暴だな」

昇はよれた襟元を直した。

「お前が朝っぱらから騒ぎ立てるからだ」

「なかなかドアを開けないのが悪い」

「何しに来た」

「ことの真相を聞きに来た」

「お前に話すことなどない」

「そうはいかない、俺も大体の筋は掴んでいる」

「じゃあそれでいいだろう」

「いや、確認したいことがある」

「しつこいな」

ヒロはあからさまに嫌な顔をした。

「ねえ、どうしたの？」

アリアが着替えて、階段を下りてきた。

「昇？ 十無と一緒に東京へ帰ったんじゃないの？」

「今回の騒動の真相を知るまでは帰れない」

厄介な探偵を追い払う術もなく、ヒロは仕方なく昇を居間へ通した。

「アリア、柚子を迎えにいつて来い。おまえ、俺の書いたメモを持ってきてしまったらう。きっと柚子が心配しているぞ」

「……わかった」

携帯電話で連絡を取れば済むことだと思ったが、アリアはヒロが

席をはずさせようと考えているのがわかったので、仕方なく出かけることにした。

ヒロは窓をのぞいて、アリアが玄関を出て行くのを確認し、タバコを一本取り出した。

「あいつがいると吸えないんだ」

ヒロでもアリアの言うことに耳をかすこともあるのかと、昇は意外に思った。

二人はがらんとした何もない居間の床に、向かい合わせに座った。アリアが帰るまでの間だけ話しに付き合う。それ以上はだめだ、いいか？」

昇はうなずいた。

ヒロはタバコをくゆらせ、漂う煙を眺めている。話すのをためらっているようだった。

「おい、アリアが帰ってきてしまう」

「せかすな、そんなに早く帰っては来ない」

吸い始めたばかりの煙草を銀色の携帯用灰皿にもみ消しながら、ヒロはふつと煙を吐き出した。

そして、ヒロは面倒そうにやっと口を開いた。

「何が聞きたい？」

「美原なながネックレスはあると言っているが、どうやらなくなっているようだ。やはりお前とDの仕業か」

「さあね。ま、これ以上俺とアリアに構うなと警告はした」

「警告って、あの偽ダイヤと模造紙の札で、警察に連行させて慌てさせたということか。……それで、美原夫人と何を話していた？」

「……俺はななに会ってもう一度確かめたいことがあった、ただそれだけだ」

「何を？」

「言えない。何だ、事件のことを訊きたい訳じゃないのか」

「アリアのことを知りたい。……そのことはアリアにも関係があるのか？」

「……ある」

「何故アリアと美原夫人を会わせない？ アリアは会いたがっているようだ」

「……」

ヒロは黙ってしまった。

「あいつが辛そうなのを黙って見ていられない。……話してくれないか」

「話してどうなる」

「どうなると言うわけではないが……」

「ふん、まあいい。熱意だけは認めてやる」

ヒロは変な褒め方をして苦笑し、再び煙草を取り出すとマツチで火をつけた。

「話しても解決しない問題だ。俺にとっては重要だが、お前が聞いたところで何の意味も持たないことだ」

ヒロはそう言うてから少し考え込み「ただ、……俺の気持ちやすつきりするかもしれん」と呟き、ため息と共に煙を吐き出した。

「聞いてくれるか」

ヒロが煙草をくわえたまま、ちらりと昇の顔を見たので、昇は無言で頷いた。

「アリアには聞かれなかった」

俯いて、ヒロは言葉を搾り出すように言うと、話しを続けた。

「……美原ななは知っての通り、俺の父親と結婚して俺の義母になった。ななはその前、結婚詐欺師だった。はじめ、ななは美原と本気で結婚する気などなかった。詐欺の力モにするために美原に近づいたってわけだ。ななは同時に矢萩孝介という男も力モにしていたが、ななに誤算が出た。矢萩には妻がいたのだ。ななにとって悪いことは続き、自分が妊娠していることに気づいた。どうにもならなくなったななは、美原に妊娠したことを告げ、結婚したのだ」

ヒロは他人事のように淡々と話した。冷静に見えたが、目だけがぎらぎらしていた。感情を押し殺しているが、ヒロの瞳には怒りが

宿っていた。

陽気な日差しが、居間を照らしているというのに、昇はひんやりとした寒気を感じたのだった。昇は片膝を立てて、身じろぎせずに聞き入っていた。

「美原は、ななが結婚詐欺師とは露知らず、お腹の子が自分の子供だと、疑うことなくなと結婚した。幼いときに母親が病死して母を知らずに育っていた六歳の俺は、新しい義母に甘えた。ななは美しく、優しくかった。入学式では自慢の義母だった。絵に描いたような幸福な家庭だった。アリアが生まれるまでは」

ヒロの声が止まった。

眉間にしわを寄せ、銀色の携帯灰皿を懷から取り出して、煙草の灰を落とした。

何が語られるのか。昇は話の続きを待った。

「アリアが生まれた直後、美原の耳に矢萩の存在が知れたのだ。ななは結婚してから矢萩とはまったく切れていたようだが、過去のこととがばれたのだ。結婚詐欺師だったことも。同時に付き合っていたことも。美原はななを責めた。そして、アリアが矢萩の子ではないかと疑ったのだ」

ヒロは短くなった煙草をもみ消して立ち上がり、昇に背を向けてベランダの窓辺に立った。

過去を振り返るのが辛いのか、ヒロにためらいが見えた。

「家庭はぼろぼろだった。美原はアリアを嫌い辛く当たった。見かねたななは別宅の家政婦にアリアを預けた。両親は顔を合わせれば喧嘩だった。そんな生活が五年続いた。とうとうななは美原に言った。アリアは矢萩の子なのだと。当然、即離婚となった。矢萩の妻が病死したと知ったななは、離婚になることを計算づくでそう言ったのだ。そして、あの女は五歳のアリアを連れて矢萩の元へ走った」

酷い母親さ。ヒロは低い声で呟いた。

アリアは生まれてから父親に愛されず、実の母親とも離されて育ったのだ。

温かい家庭を知らないアリア。ふと見せる寂しそうな表情は、そんなところから来るのだろうかと思った。

「俺はアリアが忘れられなかった。別れ際、母親に連れられたアリアは、涙を堪えて家を出て行った。『お兄ちゃん』と呼ぶ、心細そうな声がいつまでも頭から離れなかった。あいつを守ってやれるのは生まれてからずっと、俺だけだった。俺はどうしても会いたくて、こっそり矢萩の家に会いに行ったのだ。だが、すでに家を引き払った後だった。お前も知っていることだが、矢萩はななが籍を入れる前に交通事故で死んでいた。まだ籍を入れていなかったなには、遺産はまったく手に入らなかった」

ななの思い通りにはいかなかったのさ。

ヒ口はななをさげすむように鼻で笑った。

悪いことは何故続くのか。アリアはいつ安住できたのだろうか。

普通の家庭で何事もなく育った昇は、言葉がなかった。

「俺は一年、二年と過ぎてもアリアを忘れなかった。見かねた親父は、俺とアリアが血の繋がらない兄弟だと俺に告げた。不倫の末にできた子だと。何故、アリアにだけ親父が辛く当たるのか、それedyと理解できた。だが、アリアには何の罪もない。俺は親父に、アリアを探し出して、引き取ってくれと頼んだ。親父は取り合ってくれなかった」

ヒ口は煙草に火をつけては、すぐにもみ消した。その回数が徐々に多くなった。銀色の携帯用灰皿は吸殻で一杯になっていた。

昇はヒ口の口が重くなってきたように感じた。

「親父は離婚後、仕事が全てになった。俺のことも会社を継ぐ人間としか見ていないとわかったとき、親父とは口をきかなくなった。俺は高校生になると、少しでも早く家を出るために、バイトで金を貯めた。冷え切った居心地の悪い家にいたせいで、俺はアリアを忘れなかった。幼いあいつの笑顔、俺に笑いかけてくれたあの顔を思い出すときだけ、俺の人間らしい感情が呼び戻される感じがしたのだ」

煙草の煙が部屋を曇らせるほどになっていた。昇はタバコを吸わないので、煙草のにおいが鼻についた。

煙はヒロの苛々に比例しているようだった。

「探偵のバイトもした。そのバイトはアリアを探すのに好都合だった。ノウハウを教えてもらい、すぐ活用した。そして、とうとうアリアを見つけたのだ。十三歳になっていたアリアは、幼い頃のような笑顔はなく、醒めた表情で俺を見た。俺は一目見ただけで、アリアがどれだけ苦労したのかよくわかった。だから俺はアリアを連れ去った。ななはまた結婚詐欺で稼いでいたのだ。そのためにアリアは転居を繰り返し、まともな生活をしていなかった。あれは養育放棄だ。俺がアリアを探し出すまでの約八年間、あいつは一人で生きてきたようなものだ。俺はすぐに大学をやめて家出し、二人で暮らした。五歳のときに会ったきりだったから、アリアは俺のことを覚えていなかったが、少しずつ俺に心を開いた。……それからの生活はとても充実していた」

ヒロは疲れたように額に片手を当てて、大きく息をついた。話はまだ続いた。

「ななはアリアを取り戻すためにずっと俺達を探していたようだ。そして、三年が過ぎたある日、ななは俺に接触してきた。俺はアリアを帰す気はないといった。そのとき、ななはアリアの本当の父親は美原博一だ、俺とアリアは異母兄弟だと告げたのだ。そして、俺を嘲笑った」

「アリアは知らないのか？」

「知らない。俺は言えなかった。アリアを……愛していた」

ヒロはしっかりと組んだ両手を額に押し当てて俯き、目を伏せた。昇にはヒロの肩が震えているように見えた。

「かなり落ち込んだ。俺はアリアの側にいらねず、しばしばアリアを一人にしておくことが多くなった。一時はいろんな女の所へ泊まり歩き、かなり自暴自棄になった時期もある。悪いことは一通りやった。そんな時、いつものように暫く外泊していた俺をアリアが探

して見つけ出し、連れ戻しに来て……」

ヒロは大きいため息をついた後、一層口が重くなった。

「……帰って来たと懇願されたことがあった。あいつと一緒に帰ったが……俺は気丈でいられなかった」

ヒロは幾分顔を上げ、昇の目を見つめた。

「俺は……薬を盛ってあいつを……アリアはこのことを、知らない」
昇は絶句した。

ヒロは、抱いたのか。父親が同じかもしれない弟……（いや、妹かも）のアリアを。

昇はショックを受けた。アリアが知らないとはいえ、二人がそんな関係だったとは。

「今年の二月頃も、側にいることが辛くなってアリアから逃げた」
昇がアリアと一緒に柚子を探しに旭川へ行ったときだ。ヒロはアリアをつれて旭川に残った。二人でいて、ヒロは辛くなったのだらう。

「何度も、吹っ切ろうとした。そして毎回挫折した」

昇は黙って耳を傾けるしかなかった。

「……今回、もう一度本当に異母兄弟なのかと丁寧に問いただしたら、今度はわからないと答えやがった。同時に付き合っていた男がいて誰が父親かわからないと言った。ななはアリアを連れ戻すために何を吹き込むかわからない。だから会わせたくない」

ここまで話し終えると、ヒロは少し自嘲的な笑みを浮かべ、胡坐をかいている足を組みなおした。

「……複雑、だな」

そう言うほか、昇には言葉が見つからなかった。

アリアとヒロは深いところで支えあっているのだ。相手が好きだというだけではない、深いつながり。自分が生きるために必要な相手なのではないか。

この二人の間に、入り込む余地はないのだろうか、昇は思った。
「探偵、お前あいつのこと好きだと言っていたな」

「ああ」

「お前はあいつを支えられるか？」

面と向かってそう言われると、昇はすぐに肯定できなかった。

「……支えているつもりだ」

「そうか……つまらんことを話したな、忘れてくれ」

ヒロは最後に残っていた煙草を取り出し、口にくわえた。

「俺はあいつの側にいてはいけない存在なんだ」

ヒロは昇に聞こえないくらい小さな声でそう呟いた。

11・雲隠れ

アリアはヒロと昇が何を話すのか気になりながら、タクシーで柚子を迎えに行った。

マンションはテレビの音だけが響いていた。

柚子は一人ぽつんとソファに座り、ただぼんやりとテレビの画面を眺めていた。アリアには柚子が何も見ていないように思えた。

「ああ、アリア。来てくれたの？」

と、柚子はテレビのほうを向いたまま無表情で呟いた。

「ごめん、一人にして。迎えに来たよ。急に別のアジトに移動することになって」

「アリア、携帯電話の電源を切っているんだもん。不安になるじゃない」

柚子は怒っている口調だったが、瞳に涙が滲んでいた。

アリアははっとした。柚子はかなり心配していたのだ。

「昨日は色々あって……今、来る時柚子にかけても繋がらなかったから」

「待つのが嫌で、電源切ったの」

柚子は怒っているというより、泣くのを堪えているようだ。

「……柚子」

「心配するじゃない！」

「ごめん」

謝っても、柚子は返事をしなかった。

「お茶でも淹れようか」

どう対応していいものか考えつかず、アリアはキッチンへ行ってお湯を沸かした。

火にかけているやかんを見ながら、自分がしたことはいつもヒロが自分に行っていることと同じではないかと、アリアは思った。

ティポットを暖めてから、湯を淹れて茶葉をしっかりと三分間蒸ら

した。

柚子のところへティセットを運ぶと、アリアはゆっくりとカップに紅茶を注いだ。すぐ横に座ったアリアの動作を柚子はじっと見ている。

ふわりとダージリンの香が漂った。

「ビスケットはないけれど……」

そう言いながら、アリアはそつと柚子の前に白いカップを置いた。今できることは、柚子のために心を込めてお茶を淹れることくらいだ。アリアはそう思ったのだった。

「夏でもホットなのね」

「アイスのほうが良かった？」

柚子は両手でカップを持ち、一口飲んだ。

「……初めてアリアに淹れてもらった」

「そうだったかな？」

「……もう、待つのは嫌なの、待たせないで……置き去りにしないで」

白いカップに入った琥珀色の液体を見つめながら、柚子は嚙締めるように言った。

一人でいることに極端に反応した柚子。過去に何かあったのだろうか。柚子にも自分と同じように癒えない傷が、心に深く刻まれているのだろうか。アリアには知るすべもなかった。

「わかった。本当にごめんなさい。……許してくれる？」

アリアは心から柚子に謝った。

柚子は怒ったように「今回だけ許す」と言ったが、表情はもう穏やかだった。

「良かった」

アリアは柚子の髪をくしゃつと撫ぜると、頬にキスをした。

「もう、アリア、紅茶がこぼれる！」

「ああ、ごめん」

柚子に笑顔が戻り、アリアはようやく肩の力が抜けた。

昼過ぎに、アリアは柚子と一緒にアジトへ着いたのだが、昇はもういなかった。

「お前達、遅かったな。あの探偵はだいぶ前に帰ったぞ」
玄関先にヒロが出てきた。ヒロは疲れているようだった。

「ヒロが追いつ返したんじゃないの？」

柚子の言葉が勘にさわり、ヒロはじろりと睨んだ。

「余計な口を叩くな」

「あーっ、凶星でしょ」

「二人ともやめて」

つくづく相性が悪いようだ。おかげで昇とヒロがどんな話をしてたのか聞きそびれてしまった。アリアはため息をついた。

「ねえ、アリアから聞いたけれど、美原なのところへ帰らないって言ったんだから、隠れる必要はないんじゃない？」

「はいそうですかと聞くような相手ではない。多分、ななが嫌がらせを仕掛けてくるだろう」

「嫌がらせ？」

柚子はきょとんとした顔をして聞き返した。

「……俺達の『仕事』の邪魔をしてくる可能性がある」

「そんなことできる？」

「ななはその手のプロだからな」

美原なながどんな人物なのかよく知らない柚子は、ヒロからそう言われても半信半疑のようで、「心配すぎじゃないの？」と真に受けなかった。

三人は何もない居間の床に座った。

「……じゃあ、東京に帰る？」

アリアはヒロの顔を窺いながら聞いた。

「音江探偵から聞いて、東京のマンションもななに知れているはずだ。ここもあの子が知っているし、他の場所に暫くいたほうがいい。今夜、ここから移動するから、それまではじっとしている。俺はそれまで少し眠る」

ヒロは険しい顔をしてそう言うと、二階の部屋へ引っ込んだ。

ヒロの指示。柚子でさえこれ以上聞くのをためらわせた。勿論アリアもヒロに口出しできなかった。

「これから何処へ身を隠すつもりかしら」

「さあね、わからない」

アリアは奥の部屋から、大きいクッションを引っ張り出してきて、その上にごろんとうつ伏せに寝転がった。

「……でも柚子まで一緒に隠れる必要はない、東京へ帰ったらいい」

「一人で帰ってもつままない、アリアと一緒にがいい」

柚子はそう言うと、横になっているアリアの背中を枕にして、横になった。

「こら、重い」

「えへへ、だって居心地が良いもの」

ふざけあっているうちに、いつの間にか二人はうたた寝をしていた。

窓の外では昇がじつと張り込みを続けていた。

「動く気配なしか」

昇は辛抱強くそのまま車中で張り込みをしていたが、夜中にほんの数分目を離れた隙に、三人は忽然と姿を消したのだった。

昇が辛抱強くアリアたちを張り込んでいたその日の夕方、音江おとえまき 榎

は、この仕事を請けたのを後悔し始めていた。

「あら、気が進まないかしら。でも良いお仕事だと思わない？」

それを感じ取ったのか、美原ななは微笑みながらそう言った。

美原邸の客間のソファは、体が沈み込んでしまい、居心地が悪かった。

榎は今回の最終調査報告書を届けに来て、初めて依頼主である美原ななと対面したのだった。

最初の依頼は、メールだった。

家出した行方知れずの子供を捜してほしいという文面だった。

槇は子を思う母親がずっと必死に探し続けているのだと思い、依頼を受けたのだった。

だが、子の特長を伝える二通目のメールを見て、違和感を覚えたのだ。

自分の子なのに、写真が全くないという。義兄である美原弘文と共にいると思うが、母が探していることを絶対に知られないようにしてほしいとのことだった。

不審に思った槇は、一度は断りかけた。

次に来たメールには、義兄にそそのかされて犯罪に手を染めているわが子をぜひ取り返したいとあった。もし事件に巻き込まれていたら、警察の手に渡さないようになんとか守ってほしいとあり、高額報酬も明示されていたのだった。

槇はその高額な報酬に惹かれてしまったのだ。

だが、美原夫人が依頼主だったとは。

このひとは犯罪のにおいがする。

美原夫人に対面し、これ以上かわらない方がいいと槇は直感的に思ったのだ。

今夜、この調査書を渡して終わりになるはずだった。

夫人はゆつたりとした薄手のガウンを羽織り、背もたれの高い一人掛け椅子に腰をおろし、ワイングラスを弄んでいる。美原博一はまだ帰宅していなかった。

「もう、この調査はこれで終了だと思いますが……」

「そうかしら？ 契約では、あの子の今の居場所を調べてと頼んだのよ。これは前にいた場所じゃないの。こんな報告をもらっても何の役にも立たないわ」

調査書をパラパラとめくり、そのまま槇の目の前にあるテーブルにパサリと無造作に置いた。

「でも……」

美原夫人の前になると、いつも威勢のいい槇でも萎縮してしまい、反論できない。妙に納得させてしまう威圧感がある。

「ま、あの子の最近の様子がわかって面白かったけれど、その報告じゃ盗みの証拠もないし、脅しの材料にもならないわ」

ふふと美原夫人が笑ったが、槇は何故だか背筋がぞつとした。

「ねえ、あなたあの東昇とか言う同僚のことが好きなんでしょ？」

美原夫人はすつと立ち上がったかと思うと、槇の座っている横に座って槇にそう囁いた。

「え、あの、そんなこと……」

突然意外なことを聞かれ、槇は動揺した。

槇の直ぐ鼻先に美原夫人は顔を近づけ、長い睫毛の奥にある大きな瞳で、槇の心の動きをじつと窺っているようだった。

蛇に睨まれて怯える小動物のように、槇はその鈍い光の瞳から目が離せず、僅かに上体を後ろへ反らした。

「でも、あなたは不利ね。昇はアリアに惹かれているわ」

言葉の一つ一つが槇を動揺させた。

自分のほうが調べられているのかと槇は薄気味悪くなった。

「怖がらないで、私は他の人より多少人の気持ちがわかるの。占い師のようにね」

美原夫人の言動に揺さぶられていくうちに、槇は美原夫人の手中に落ちていた。

「いい？ このままではあなたは不利なの。良いことを教えてあげる」

槇は暗示にかかったように、美原夫人の言葉に聞き入った。

「アリアはね、本当は女なの。今は、あの双子がそれを知らないから、まだ少しはあなたに望みがあるかもしてないけれど、これは絶対に知られてはいけないわ」

槇の瞳は大きく見開いた。

「だから今のうちにアリアを私の手元へ戻るように仕向けるのよ。そうしたら邪魔者はいなくなるでしょ？」

美原夫人はそう言っ、槇の膝の上にある手にそつと手を重ね、囁いた。

「いい？ アリアは、昇の側にいてはだめ」

その美原夫人の囁きは、櫛の頭の奥深くに薄黒く響いた。

櫛は足取りが重く頭はぼうつとしたまま、美原邸を後にした。

「さあ、しっかりと私のために働いて頂戴。真っ直ぐなお嬢ちゃん」

美原夫人は、窓から櫛の車を見送りながら楽しそうに呟いた。

12・新たな事件

東昇はその後もアリア達の足取りをつかめなかった。仕方なく東京へ戻り、数ヶ月が過ぎていた。

「一人で長時間の張り込みは限界があるから仕方がない。そのうちアリアはきつとまた現れる。そういつまでもくよくよするな」

十無が何度そう言い聞かせても、昇は落ち込んだままだった。

「そうは言っても、何処に現れる？ 全く分からないんだぞ」

とうとう十無はしよげ返っている昇を見かねて、仕事から帰宅したある日、打ち明けてしまった。

「……実は、それらしき情報を掴んでいる」

「酷いな、兄貴だけ知っていたのか。それで暢気にしていたのか」

「お前に言ったらまた仕事そっちのけで首を突っ込みそうだから黙っていたが、今でも仕事をサボっているし……」

「いいから、早く教える」

「捜査中だから絶対余計なことをするな」

十無はある住所を昇に伝えた。翌日の午後、昇は十無の予想通り仕事を放り投げ、その場所へ向かった。

そこは、文京区、小石川にある山の手の閑静な住宅街で、古い平屋の一軒家がマンションに囲まれるようにして建っている場所だった。

「どうやら刑事達の先客はいないようだ。」

昇はその場に張り込み、谷崎たにさきという表札のある、家の様子を伺った。

もう十月になるというのに、東京は残暑が厳しく気温は三十度を超えており、昇はじつとしていても汗だくの状態だった。

暫くすると、眼鏡をかけた若い大学生風の男が、その家を訪ねてきた。四十代そこそこの女性が玄関で出迎えると、家の中へ案内した。

二時間が過ぎ、再びその男が玄関から出てきた。高校生くらいの少女も見送りをしている。門の外まで見送り、かなり親しそうだ。「家庭教師だろうか？ 兄貴は出入りする人物に注意してみると言っただが」

昇はその男を尾行した。男は通いなれているようで、入り組んだ住宅街を迷わず歩いていく。

どうやら地下鉄駅に向かっているようだ。高い塀や、建物のある角を曲がり、何度も姿を見失いそうになりながら昇も急いで後についていった。

「何の真似ですか」

昇が角を曲がるとその男が待ち構えていた。昇を睨みつけている。尾行で気づかれたことはそうない。得意としていると自負していた昇は驚き、声が出なかった。

「悪戯に人をつけまわすのは犯罪ですよ、そういうのを世間ではストーカーと言う」

インテリか。嫌な言い方をする奴だと思いながら、昇はやっと落ち着きを取り戻した。

「失礼しました。人を探しているもので」

十無から、決して接触するなど強く禁止されていたことを忘れたわけではないが、こうなっては仕方がないと判断し、昇は逃げずに対応した。

「僕に何か関係ありますか？」

「それはわかりません」

「どういことです。じゃあ後をついて来るのは止めてください、迷惑です」

男は眉間にしわを寄せた。大学生風のその男は、間近で見ると昇より背は低く細身で、この暑さだというのに長袖のボタンダウンシャツを着ている。前髪を長く垂らし、銀縁眼鏡の奥の瞳は切れ長で、女性受けしそうな顔立ちだった。

「浮島先生、忘れ物！」

さっきの少女が、遠くからそう言って駆け寄ってきた。

「先生、足が速いのね。やっと追いつけた。母が夕食にどうぞって、温かいうちに食べてくださいね」

少女は黒く艶のある長い髪を揺らし、息を切らしながらそう言った。礼儀正しく、育ちのよさが感じられた。

「ああ、美弥子ちゃん、わざわざありがとう」

浮島と言う男は、紙袋を受け取った。どうやらこの少女の母親が手作りした惣菜らしい。

「先生のお友達ですか？」

美弥子が昇の方をちらりと見て言った。

「いや、ちよつと道を尋ねられただけです」

何も言うなと言わんばかりに浮島は昇に目配せをした。

「美弥子ちゃん、それじゃあまた」

「はい、さようなら先生」

少しこちらを振り返り軽くお辞儀をすると、美弥子は足早に去っていった。

「……変な心配かけたくありませんから。それでは僕は急ぎますので」

「待て」

「まだ何か用ですか」

「アリアって言う奴を知らないか？」

単刀直入に名前を出して、自分でも馬鹿な質問だと思いつつも、昇はそれしか思い浮かばなかった。

「どこかで聞いたことがありますね。……そうだ、以前教えていた女子高校生のお兄さんが確かアリアと呼ばれていたような。でも、その娘は先月転校したので、もう東京にはいません」

浮島は少し考え込み、思い出しながら話した。

「何処へ転校したのかわからないか？」

「わかりませんね」

「じゃあ、それまで何処に住んでいたのか教えてくれないか」

「いいですが、ところであなたはその人とどういう関係ですか？」
「俺は探偵で……そいつは……大事な奴なんだ。突然いなくなつて心配している」

何と答えて良いか、昇は少し言葉に詰まった。

「そうですか……この住所です」

浮島はメモ用紙に住所を書き、昇に渡した。

「ありがとう、後をつけて悪かった」

昇は路上駐車している車に戻り、早速その住所に向かった。
だが、辿りついたのは何故か見覚えのあるアパートだった。

「やられた！」

昇は思わず叫んだ。そこは以前、昇と十無が住んでいたアパートだった。

あの浮島という男がアリアだったのだ。

東昇は浮島という家庭教師がアリアだと確信し、すぐに十無へ電話をしたのだが連絡がつかなかった。署にも出向いて見たが、十無は忙しく飛び回っており、とうとうその日はつかまらなかった。
そうこうしているうちに、ことは起こってしまった。

その日の夜、谷崎家で盗難があつたようだった。

ようだった、と言うのは谷崎家では盗難届けを出さなかったため、正確なところはわからなかった。が、谷崎家は急に人の出入りが多くなり、蜂の巣をつついたような状態だった。

同時に、家庭教師も音信不通になり、姿を消していた。

東十無はその情報を受けて、怒り心頭だった。

「昇、谷崎に出入りしている奴と接触したな！ 感づかれて逃げられてしまった。お前のせいで何もかもパアだ」

明け方、十無の怒り声で昇は起こされたのだった。

十無は徹夜明けで充血した目で昇を睨み、昇の襟首をつかんだ。

「あの家庭教師がアリアだ、あいつと接触したことを隠していただらう？」

「隠していたわけじゃない。接触する気はなかった。たまたま成り行きで……言おうと思ったが、電話が通じなかったんだ。でも、どうして先に教えてくれなかったんだ」

「お前に教えたら、それこそあいつに掴みかかって今何処にいる！と、やるだろう！」

凶星だった。昇はうなだれた。

「この次はもう邪魔をするな。ま、次があつたら話したが」

十無は疲れた顔をして、襟首から手を離した。

「また、行方がわからなくなったのか？」

「誰かのせいで」

やっとの思いでアリアらしき人物を見つけ、周囲を固めていた矢先だった為、十無はチクチクと嫌味を言わずにいられなかった。

「本当に悪かったと思っている」

昇に悪気がないのが返って厄介だった。

「終わったことだ、もういい」

十無はベッドサイドに力なく座り込んで、額に手を当てて大息をついた。十無の落胆は大きかった。

こんな思い入れがあるのは、別の感情があるのではないかと昇は考えずにいられなかった。

「兄貴……前から聞こうと思っていたけれど」

昇はおずおずと切り出した。

「兄貴は、アリアのことを……どう思っている？」

十無は顔を上げて昇をちらと見た。

「……前に同じことをヒロにも聞かれた。……アリアは被疑者だ。きちんと罪を償ってほしいと思っている」

少し考え、十無はそう答えた

「そんな模範解答は聞いていない。本当のところ、どうなんだ」

「どうもこうもない」

「言っていることと行動がかみ合っていない。アリアのことになると、兄貴は眼の色が変わる」

「そんなことはない」

「俺は、あいつが好きだ。あの、人を食ったような態度も、一人で何かを抱えているような所も、全部ひっくるめて何故か惹かれる」

「あいつは犯罪者だ」

「でも、気持ちは割り切れない。兄貴はそんな風に線引きできるのか？」

「……」

「以前アリアに会った時、何があったんだ」

「何も、特別なことはない」

昇はのらりくらの十無の態度に苛々したが、十無は変わらず静かに答えた。

「本当に何もなかったのなら、アリアと初めて会った時のことを話してみる」

「そんなこと、どうでもいい」

「俺には大事なことだ。アリアはもしかして……」

もしかしてアリアは、同じ顔である十無の姿を自分に映し見ているのでは……昇にはそんな嫌な予感があった。

だが、十無は口を噤んだまま話そうとはしなかった。

追いかけても、すり抜けていく。掴んでも、掴みきれない。何処かへ消えてしまったアリア。

折角、アリアのことを少し知ることが出来たと思ったら、今ここにアリアはいない。

昇と十無はお互い知らずに、同じことを考えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2204a/>

地方都市物語・3・夏の夜の幻（再び旭川へ）

2011年5月5日22時10分発行